悪役の美学

生カス

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンフォギアの悪役って必要悪だったり悲劇の悪役だったり最後なんやかんやで味方助けたりが多かったけど、純粋で救いようのない悪役って実はいなくないか？　と思って書いてみました。

あるいはバットマンのジョーカーみたいな、あるいは時計仕掛けのオレンジのアレックスみたいな、あるいは羊たちの沈黙のレクター博士みたいな……そんなタイプとビッキーはどう接するんだろうという妄想です。

※題材の性質上、残酷な表現、不愉快な表現が多発しますので、ご了承の上ご閲覧ください。

目次

Number.11 137
Number.10 122
Number.09 109
Number.08 97
Number.07 83
Number.06 70
Number.05 55
Number.04 40
Number.03 27
Number.02 15
Number.01 1

Ｎｕｍｂｅｒ．０１

これは雨が降り続けるなかの、高架橋の下から始まる物語だ。橋の下には少年がいて、その横には、少年がどこからか拾ってきたか、それとも骨とう品やで買ってでも来たのか、とにかくそんな感想を抱くような古めかしいラジオが置かれていた。そんなラジオでもキチンとラジオ足らしめる機能はまだ生きているようで、しかし酷い雑音を伴奏に、ニュースキャスターの声がつらつらと垂れ流されていた。内容はこうだ。

『〝ツヴァイウィング〟のコンサート事故から数か月が経ちましたが、未だに遺族の怒りは収まりません。街頭インタビューでは、〝生存者は責任を取って欲しい〟という声が相次いでいます。私も同じ気持ちです。何故生存者はあのようなことを平然と――』

そのえこひいきを利かせた、我こそは正義の代弁者だと言わんばかりのキャスターの声を聞いて、少年はクツクツと奇妙な笑い声を、けれど雨音によって掻き消える程度の声量で発した。少年の特徴はまだ何も明かさない、それは今ここでダラダラと書くべきものでもないのだ。どうせ後で嫌と言うほど書かなければいけなくなるのだから。

少年はひとしきり笑ったあと、静かにだがこう言った。

「リフジンだな。フジョーリだ。楽しくなるぞ。きっと、楽しくなる。楽しみだなぁ」

少年は〝口いっぱい〟にニヤけてみせた。するとどうしたことだろうか、少年の姿が高架橋の下から、きれいさっぱり無くなっちまったのだ。もう影すら見えない。あるのはさっきからえこひいきのキャスターの声を披露させてるラジオだけだ。とは言っても、ラジオはとっくに次の話題に話を変えていた。次はこういうのだ。

『数年前に起こった〝新興宗教団体一斉自殺〟事件について続報です。ガスでの自殺ですが、遺体はどれも炭化しており、ノイズが来たことで絶望して行ったことではないかと言う意見が、公式な見解として認められました。自殺メンバーの息子と思われる人物も依然として行方不明ですが、口の部分に大きな傷を負っていたとの情報から、死亡した可能性が高く、警察は捜査の打ち切りを決定しました』

――そうだな、ここでとりあえず一つだけ、少年の大きな特徴を言っておこうと思う。

口が裂けちまってんだ、パックリと。

Number. 01 Virtual Insanity

話はさっきの雨から数年後、そして場所は朝の街中に移動する。登場人物は――ああ、安心してほしい、今度はちゃんと女の子が出てくる。しかもとびきり可愛い子だ。とは言ってもその子は今、木登りをしていてまともに喋れるような状態じゃない。――なんで木登りなんかしてるんだって？　それも今からわかるだろう。

「だいじょぶだよー、ほーらいい子だから、ほらこっちにおいでー」

別に彼女は木に向かって話しかけてるわけじゃない。木の高いところに猫がいるのだ。その猫が降りられなくて困ってるとでも思ったのだろう。彼女は学校の遅刻も省みず、猫の救助に果敢にも向かったというわけだ。

彼女の名前は立花響、栗毛くせっ毛のボブカットを、快活な顔の上に乗っけた、人助

けが趣味の女の子だ。

「よーしいい子いい子……よし捕まえたー！」

響はようやく猫を抱き上げ、声に出して喜んだ。しかしそれも束の間、〝バキッ〟という音が彼女の鼓膜をくすぐった。

「――え？」

と響が言うより先に、彼女の身体は勢いよく落ちていった。

「「――ぐえっ!?」」

彼女は猫を守るように落っこち、激突した衝撃で妙な声が出てしまった。――しかしここで、彼女の他にいやに低い叫びも聞こえた。

「……てて、痛ったー……くない。あれ？」

響は違和感を覚えた。地面にたたきつけられたはずなのに痛くない。というよりかは、アスファルトのはずの地面が不思議な感触をしている。そう思っていた時、地面からこもった低い声が出た。

「……あの」

「うわぁ!?　ご、ごめんなさい！」

響が下を見てみると、そこには響自身が下敷きにしてしまったのであろう男がいた。響は慌てて立ち上がり、男を見下ろした。

「ご、ごめんなさい。下に人がいるとは思ってなくて……」

響が謝罪するが、男はそれに無反応だった。やがて男はゆっくりと起き上がり、服についたホコリを払ったあと、響を見据えた。

男は長身痩躯だった。濡れガラスのような黒髪で、顔をマスクをしていてわかりにくいが、少なくとも大きく、それでいて気だるげな眼を持っていた。

「……あ、あの――えっと……」

「……猫」

「え？」

唐突な言葉に響は呆けた声を出してしまったが、男が自分が抱きかかえている猫を指さしているのを見て、ようやく理解した。男は言葉を続けた。

「猫、助けたんですか？」

「――あ、はい！　木から降りられなくなっちゃったみたいだったから、つい……」

「良いことをしたんですね」

「い、いやぁ～そんなこと～」

こんな風に褒められるとは思ってなかったのか、響は男の言葉を聞いて照れくさそうに身をよじらせる。そんな彼女はお返しとばかりに男に言った。

「でも、ありがとうございます。アナタがいなかったら、きっと私も猫ちゃんも大けがし

てました」

　響は屈託のない笑顔でそう言った。すると男は「そうか」と困った様子で呟いた。そのあと男はこう言った。

「俺は良いことをしてしまったわけなのか？」

「――プフッ！」

　男のそんな様子を見て、響は思わず吹き出してしまった。「良いことができた」ではなく「良いことをしてしまった」という男の困り顔が、彼女にはどうにも可笑しく見えたのだ。

「アハハハ！　いいことしたんだから、そんな困った顔しなくていいじゃないですかー」

「……そうですか、まあそうなんでしょう」

　マスク越しに脱力しきった声で言う男を見て響は、この人は、ちょっと変わってるがいい人だと、そう思った。そして彼女はこの人に御礼がしたいと思ったらしい。

「――私、立花響！　キラキラの１５歳女子高生です！」

「……そっか」

「……えーと、そちらは？」

　せっかく勇気を出して名乗ったのにも関わらず、そのまま受け流しちまうような男を見て、響は思わずといったように催促した。本当に変わった男だと、彼女は思っている

ことだろう。その催促は無駄にはならなかったようで、男は名乗った。
「――〝ツギハギ　ツギ〟、ツギハギが苗字、ツギが名前」
「へーなんかかっこいい名前ですね！」
世間一般に見てかっこいいかどうかは別として、本名かどうかすら怪しいそれに対して、きっと彼女は本心からそう言っているのだろう。彼女の笑顔にはそう思えるだけのものがあった。
「歳は響さんと同じですよ」
「わー同い年だー！　やったー！」
そうはしゃぐ響に対し、ツギハギは何か物思いにふけってるようだった。それが不思議だったのか、響もはしゃぐのをやめ、そのことについて聞いた。
「どしたの？」
「……あんた、ジョシコーセーって言ってたよね？」
「うん」
「学校はいいの？」
「うん……うん？　あ、あーッ！」
今まで忘れていたようだ。響は携帯で時刻を確認するなり、断末魔のような声をあげた。

「うあーもー絶対遅刻だよー！　あ、ゴメン猫ちゃん！　私もう行くね！」

そう言って彼女は抱えていた猫を地面に降ろした。すると彼女は

「ツギくん！　ゴメン御礼はまた会ったらで！　ほらツギくんも学校遅れるよ！」

「……わかった、また」

「うんまたね！」

響はがむしゃらに走り出し、あっという間に数百メートル先まで行ってしまった。

「俺もボチボチ行くかあ」

ツギハギはそう言って背中を伸ばした。すると下の方から「ニャア」という声が聞こえた。ツギハギがその方を見ると、声の主は先程の猫だった。

「ニャア」猫はもうひと鳴きして、ツギハギの後を去った。すぐそこの曲がり角を曲がって、猫はすぐに見えなくなった。先程の鳴き声が、礼のつもりか否かは、だれにもわからないことだ。

「……さぁて、確かこの先――」

そうしてツギハギが最後にその場を去ろうとした、その時だ。その時だった。

車のブレーキ音と共に、ぐちゃりという何かが潰れた音が、ツギハギの鼓膜に触った。

「……？」

ツギハギはその音を不審に思い、先程猫が曲がった角に行ってみた。するとどうだろうか、そこにいたのは猫ではなく、若い男女のカップルと、その車だった。

「うわーヤッベ、轢いちゃったよ……」

「ちょっと勘弁してよー！　気持ち悪いじゃーん！」

カップルの喧嘩をＢＧＭにして、ツギハギはクルマの下を覗いてみた。猫はいた、確かにいた。頭が潰れ、見事にタイヤの下に潜り込み、もはや頭の原型をとどめていない猫が、そこにいた。

「あ……もしかしてキミの猫だったー？　ごめんねー？」

「ちょっとアンタ、タイヤ血まみれじゃん！　どうすんのこれ！」

ツギハギに気づいたらしいカップルが、彼にそう捲し立てる。しかし彼は聞いていないのか聞こえていないのか、ただ動かず、じっと猫の死体を見ていた。

「ちょっと！　聞いてんのアンタ！」

「まあまあよせって。あーあのさ、こんなとこで放し飼いしてる方にも責任あると思うしさ、今回はおあいこってことでさ――」

ヒステリックな女と軽い口調の男に挟まれ、ツギハギは何を思ったろうか。それはわからないが、少なくとも彼はこの時こう言った。

「別に、気にしてないですよ」

本当に何でもないように、心の底からどうでもいいことのように、ツギハギは無表情で言い放った。彼は続けた。

「この猫のことは、別に重要なことじゃないですよ。重要なことはもっと別にある」

「お、キミ話がわかるねー。そうそう、たかが猫でうるさく言わないのが大人ってもんよ」

カップルの男は安堵したことだろう。今目の前にいるこの15歳の少年が、面倒くさいタイプじゃないとわかったからだ。仮に面倒くさいタイプだとしても、マスクをつけた内気な外面のツギハギを見て、いざとなったら脅してやろうと思っていたのだ。きっとその手間も省けたと考えているだろう。男が言い終わると、今度は女が言ってきた。

「何でもいいけど、タイヤ代弁償しなさいよね。高いんだからこれ」

「やーめろってー、もうお互い水に流そうぜ？　人生楽しまなきゃ損だって、ねえキミ？」

「ええ、その通りだと思います」

「そうそ……う？」

カップルの男の考えに賛同するツギハギに、更に乗っかろうと男はツギハギを見た。しかし彼が感じたものは、底知れない違和感だった。

ツギハギの眼は、酷く穏やかなものだった。こんな場所で、こんな場面でする表情ではないくらい、彼の眼は優しかった。彼はその表情のまま、声を出した。

「重要なのは、何が死ぬか、いつ死ぬかじゃない」
「人生は理不尽で不条理だ」
「だから最高なんだ」

「だから楽しいんだ」

――――どのような過程があったかを語るのは難しい。しかし今結果として残っていることを言うと、死体が増えた。先程のカップルの頭が、奇しくも彼ら自身が轢いた猫と全く同じように潰れていた。一瞬のことだったのだろう。彼らは〝立ったまま〟頭を潰されていた。

二つの死体が派手な音を立てて倒れる。するとどうだろう。まるで肉体が役目を果たしたとでもいうように、死体はその形状のまま、みるみるうちに炭化しちまったのだ。

ツギハギは先程と変わらず、じっと猫の死体を見続けていた。それがどれくらい経った時だろうか。ツギハギのポケットから電子音が鳴った。彼の携帯端末によるものだ。彼は気怠そうに端末を取り、耳にあてた。

「ハイハイ。ああ、ああ、わかってるともさ。街中でぶっぱなすんだろ？　――ああ、そっちはクリスに任せるさ。こっちの方が楽しそうなんでね」

ツギハギは先程とはうって変わって饒舌になった。それはまるで、新しいおもちゃを貰った子供のようにも見えた。

「ああ、こっちは好きにやらせてもらうさ、〝フィーネ〟」

それを最後に、彼は通話を切った。すると、彼は猫の死体をタイヤから引きずり出し、抱きかかえた。頭のない猫に、ツギハギは言った。
「あの木の上で死ぬのと、どっちがマシだったかね？」
「しょうがないさ、あの子は良いことをした、何も悪くない。悪くない結果がこれってだけだ」
「しょうがないさ、〝良いこと〟を振りかざされたら、どんなことでも黙って受け入れなきゃってのが、世界だ」
「……不満か？　退屈か？」
「……」
「俺は退屈だ」

「だからいっぱいにしてやるのさ、この世界を、悪（ギャグ）で」

彼はそう言ってマスクを取った。
見るとどうだろう、耳まで裂けた口だけが、彼の表情を笑顔にしていた。

Ｎｕｍｂｅｒ．０２

「ハァ、疲れたー……」
　学校が終わった夕方頃のことだ。立花響は自分の自室で仰向けになりながら、精根尽き果てたというかのような態度で、仰々しく今日一日に自分に降りかかった不幸を嘆いていた。
「入学初日からクライマックスが１００連発気分だよー、私呪われてる……」
　響の住む部屋には同居者がいる。小日向未来という響と同級生の少女で、黒髪に映える白いリボンが特徴的だ。未来は先程の嘆きに呆れたようなリアクションを返した。
「半分は響のドジだけど、残りはいつものおせっかいでしょ？」
「人助けと言ってよ。人助けは私の趣味なんだから」
「響の場合は度が過ぎてるの。同じクラスの子に、自分の教科書貸さないでしょ？　普通」
「私は未来に見せてもらうからいいんだよ」
　そう言って笑う響に、呆れたような、しかし照れくさそうに未来は「バカ」と呟いた。
しかし響の意識は、既に別のモノに向いているようで、テーブルに置いてあったティー

ン誌の裏表紙を見ると「おお！」と目を輝かせた。
「CD発売はもう明日だっけ？　やっぱかっこいいなー翼さん」
「翼さんに憧れて、リディアンに進学したんだもんね、大したものだわ」
「影すらお目にかかれてないけどね……そりゃトップアーティストだから、簡単にお目にかかれるとは思ってないけどさ」
　未来の話に、響は苦笑いでそう答えた。彼女たちの通う私立聖リディアン音楽院は、現在、日本の中でトップの知名度を誇るアーティスト〝風鳴翼〟が通う学校としてよく名前のあげられる学校だ。響が聖リディアンの門を叩いたのは、先程未来が言った憧れもあるが、理由はほかにもあった。
　響はふと、自分の胸にある傷跡を見た。彼女は確かめたかったのだ、その傷の由来の真実を。それは風鳴翼に会えばわかるかもしれないと、彼女は直感していた。
「……そう言えば、響」
　呆けている響を見て、未来はおもむろに口を開いた。
「んぇ、何？」
「さっき言ってた、助けてくれた男の子のことなんだけど……」
「ああ、ツギくんのこと」
「それよ」

「へ？」

ほんの少しばかり語気が強い未来に、響は思わず声をあげた。未来は続けた。

「その〝ツギハギ〟って人、少し変だと思わない？」

「変？」

「そうよ、名前だって、明らかに偽名っぽいし。気を付けたほうがいいんじゃない？」

「心配性だなー未来は。確かにちょーっと変わった男の子だったけど、未来が思ってるような人じゃないって」

「そうかな……」

響とは違い、未来は〝ツギハギ〟という男に懐疑的だった。話で聞いただけだから、というのもあるが、響から聞いたその男の言動に、どこか拭いきれない不気味さを感じたのだ。しかしそんな未来を安心させるように、響は言った。

「大丈夫だよ。偶然だったけど、あの子は身を挺して私を助けてくれて、文句も言わないで、〝良いことをしたんだね〟って私に言ってくれた。だから絶対に善い人だよ」

「……はぁ、そうね」

未来は諦めたように返事をした。こうなった彼女は本当に頑固なのだと、よく知っているからだ。

「でも、本当に気を付けてね？　男の子って恐いんだから」

「大丈夫だって。次会ったらちゃんと、御礼しなきゃ」

響はそう言うと、ふと、窓の外を見た。彼は今何をしているのだろうか、もしかしたら、あの子も同じことを考えているかもしれない。そんなことを考えて、響は少し可笑しくなった。

Number02. If I Ever Feel Better

今日猫を助けたあの子は、今何をしているのだろうか。ツギハギはすっかり暗くなってしまった空をバックに、辺りに広がる巨大な炎を見ながら、そんなことを思っていた。

「あの制服、確か聖リディアンのやつだったよな？　また会えるかな」

彼がそうやって物思いにふけっていると、彼の頬を何かが掠めた。銃弾だった。彼の頬が切れて、血が流れだした。

「くそ……」

銃弾を撃ったのは、軍人のような装備を纏った、しかし満身創痍で斃れかけた兵士だった。ツギハギは口惜しそうな顔をする兵士の方を見て、そのまま兵士のそばまで近づき、しゃがんでできるだけ目線を合わせて言った。

「……なぁ、アンタはどう思う？　気になる女の子と会う時って、洒落た手土産のひとつでも持ってったほうがいいのかな？」

「お前……一体なんだ？　なんでこんな……」

戦慄する兵士を見て、ツギハギは頭をボリボリと掻いた。そのまま彼は立ち上がって、兵士を一瞥した。

「わかった。ごめんよ、変なこと聞いて」

「……ノイズ……」

業火の音に掻き消えそうなその声が、しかし兵士の最期の言葉となった。兵士はそのままこと切れ、そして、その体はみるみるうちに炭化していった。

「しかし、もれなく全部殺せとは、真面目だねえフィーネも。なあ？」

ツギハギは気怠そうにそう呟いた。それが誰に言ったのかはわからない。何せもうここには、彼以外の生き物がいないのだから。

彼の周りにあるのは、ただただ〝人の炭〟とそれを燃料に燃える炎だけだった。先程のような兵士だった炭、一般人だった炭など色々ではあったが、結局、どれも区別がつかなくなってしまった。

ツギハギは目を細めながら、人を薪にしたキャンプファイアを見た。炎というのは大きくなればここまで眩しくなるのかと彼は思い、手で目を覆って、思わず下を見た。そ

うすると彼は足元に、煤けた中折れ帽子があるのを見つけた。恐らく逃げ遅れた一般人の物だろう。

「お、ラッキー」

ツギハギはこれ幸いと中折れ帽子を拾い、簡単に灰を払ってから、深くかぶった。正面から見れば眼から上が隠れる程度につばが長いそれは、彼の予想通り、炎の眩しさを和らげてくれた。

そんなときに、ちょうど彼の携帯が鳴った。ツギハギは着ている安物のジーンズ、狭いポケットからそれを少しだけ苦労して取り出した。

「もしもし、ああクリス？　ちょうどよかった聞きたいことが――」

『んなことより撤退だ。急げ』

携帯からは、そんな否応なしな言葉が聞こえる。声の限りでは、話し相手は少女のようだった。

「……撤退？　もうか」

『〝装者〟の風鳴翼がそっちに向かってるのを確認した。そいつとぶつかる前に帰るんだよ』

「風鳴翼って確かアーティストのだよな？　一回会ってみたいんだけど、サインとかもらえないかな？」

ツギハギはそう言うと、クリスと呼ばれた電話の相手は大声で怒りだした。
『バカかお前ッ！　ふざけんのもいい加減にしろ！』
「わかったよ、わかったともさクリス。じゃあ言われた場所で合流な」
彼は面倒になったと言わんばかりに強引に話を切り上げ、通話を切った。彼はすこし残念そうに肩をすくめた。
「……そうだ」
彼は何か思いついたように、床に〝炭〟を使って何かを書いた。それが終わったと思うと、彼はほんの一瞬前にいた場所から、きれいさっぱりいなくなってしまった。まるでここに第三者がいたら、化かされたとでも思うくらいに、ぱっといなくなっちまったのだ。

――それから数分も経たないうちに、ヘリが一機来た。そのヘリから女性が飛び出し、ツギハギがいた場所に着地した。青い髪に青い瞳を携えた女性の名は風鳴翼という。彼女は周りを見て唇をかんだ。
『どうだ翼、生存者は？』
翼のヘッドギアの無線から、男性の声が聞こえた。
「……申し訳ありません、手遅れのようです。一課の人達は、全滅です」

『なんてことだ……敵の姿は？』
「見つかりません、気配すら……」
『そうか……了解した。一応、近辺に生存者がいないか確認してから、帰投してくれ』
「了解」
それを最後に無線を切った。そして翼は今まで耐えてたのか、歯を食いしばり、酷く怒りに満ちた声を発した。
「くっ……振ることすら出来ないで、何が剣だ……！」
彼女がそう言って下を見ると、〝あること〟に気が付いた。何やら大きな文字のようなものが、地面に書かれていたのだ。
「なんだ？」
何か敵の情報が残っているかもしれないと、翼はその文字を見るために、少し退いてそれを見た。すると翼は、これまた〝あること〟に気が付き、わなわなと震えだした。
『こういうのはステージにいかが？』
そう書かれた周辺には、人だった炭がまるでオブジェのように均等に配置され、それを彩るように、綺麗な円形に業火が燃え広がっていた。

「――ッ！」

翼は怒りで声も出ず、ただ目を見開いてその光景を凝視した。そして彼女は決意した。決して許しはしないと。必ず己の刃で斬ってやると。

◇

「あのメッセージ、見てくれたかなあ」

観光名所の塔の上、展望台の屋根で、ツギハギはぼんやりとそんなことを言った。翼のいる場所は遠方からでも炎のせいで明るく見え、彼はそれを眺めながら、仕事仲間を待っていた。

「あいっ変わらず悪趣味だな、お前」

棘のある声が、ツギハギの後ろから聞こえた。声の方を見ると、銀色の鎧を着た少女が、ツギハギを睨んでいた。兜のせいで顔は見えないが、銀色の髪がたなびいていた。

「ようクリス、お疲れ」

「……その帽子、なんだよ？」

ツギハギの挨拶には答えず、少女はそう聞いた。すると彼は、何でもないように言った。

「炭にしたやつの中に、センスのいい奴がいたみたいでね。かっこいいだろ?」

「お前、なんでそんななんだ」

酷く震えた声で、少女は、雪音クリスは聞いた。

「なんでそんなにケロッとしてやがる、なんで大勢殺してそんなに平然としてやがる、自分のしていることがわかってんのか!」

耐え切れなくなったのだろう、クリスの声は次第に荒げ、責め立てるようなものになった。それに対してツギハギは言った。

「どっちでもいいじゃないか、わかっていようがいなかろうが、加害者が反省してようが笑ってようが、死んだ奴らからすれば……そうだな、知ったこっちゃないだろうよ」

「……けどよ、そう言う問題じゃないだろ」

ツギハギの言ったことにクリスも思うところがあったのだろう。しかしそれでもクリスは反論した。ツギハギはそれに、抑揚のない声で言った。

「……その問題は多分、クリスには理解できて、俺には理解できないもんだと思うよ。きっと、そういう類なんだ」

その言葉に、クリスはもう何も言わなくなった。兜の中にあるその表情はやるせない

ような、どうしようもないものを見るような、少し悲しいものだった。
「……ところでさ」
「――なんだよ?」
「気になる女の子に会う時って、洒落たプレゼントでも用意した方がいいと思う?」
ツギハギは困ったように、その裂けた口を歪ませて、そう聞いた。

Ｎｕｍｂｅｒ．０３

ツギハギやクリスが拠点にしている場所として、岸辺に建った巨大な洋館がある。スコットランドかドレスデンにでもあるような――実際の場所などわかりようもないが――その館はツギハギの雇い主であるフィーネが用意したものだ。それ故にその外側の雰囲気とは打って変わって、中は映画のマッドサイエンティストが使うような機械でいっぱいだった。無論、大広間も例にもれずそうで、クリスとツギハギはそんな場所で食事をとっていた。

「……前々から聞きたいことがあったんだけどよ」

クリスは用意された食事を、ボロボロこぼして食べながら、対面して座っているツギハギに聞いた。彼はクリスとは対照的に、フォークとナイフを使い上品に食べてはいるが、その口裂けな見た目と相まって、どこか猟奇的な雰囲気をもっていた。

「なんだいクリス？　食後のケーキが足りないんなら、俺の分も食っていいよ」

「んなことじゃねえよ！　……くれるんなら貰うけど」

クリスは一度マグカップに口をつけ、いったん喉を潤してから、話を続けた。

「そうじゃなくて、お前の目的だよ」

「目的？　何のだい？」
「フィーネに協力してる理由が見えねえって言ってんだ」
「ああ」
　クリスとツギハギは、ほぼ同時期にフィーネに拾われ、知り合ってもう長くなる、しかしそれでも、クリスはこの裂けた口の両端を乱雑に縫い付けた、同年代の男を測りかねていた。
　クリスがフィーネと共にいる理由は至ってシンプルだ。彼女は過去の経験から戦争を人一倍憎んでいる。それ故にフィーネという人物が掲げた〝戦いの意志と力を持つ人間を叩き潰し戦争の火種をなくす〟という思想に酷く共感し、これまで全ての力をフィーネのために使ってきたのだ。本人が自覚しているかは怪しいところだが、クリスはフィーネに少なからず依存しているきらいがあった。
「どうなんだよ？　やっぱりお前だって、戦争を失くしたいからフィーネに協力してるんだろ？」
「本気かよ？」
　クリスが聞くと、ツギハギは愉快そうに、クツクツと笑いながらそう聞き返した。それが気に障ったのだろう。クリスはツギハギを睨んだ。
「……何がおかしいんだよ」

「おい、おい、おい、そう怒るなよ。――ああそうだ、目的だっけ」

クリスの理由は先に書いた通りシンプルだ。しかしツギハギの目的は、今日に至ってもクリスにすらわからなかった。ツギハギはひとしきり笑ったあと、いったんナイフとフォークを置いて、続けた。

「――クリスってさ、おもちゃは好きか?」

「……さあな、そんなもん気にする暇もなかった」

「そうか……ああいうのってさ、子どもを楽しませるために、結構ギミックがこだわってさ。ギターを持った花がカシャカシャ動いたり、車がロボットに変形したり、中にはゼンマイ巻いたら猿が間抜け顔でバンバンシンバル鳴らすやつとかもあってさ。猿のやつが一番好きだな、俺は」

「どういうことだよ?」

「だからその、えっと……重要じゃないんだよ、別に。世界平和とか戦争根絶とか、そういう、多分崇高なものは、俺にとっては特段重要なわけじゃないんだ」

「だから! 何が言いたいんだよ!」

クリスは怒鳴った。しびれを切らしただけではない。どこか無意識に、怯えてしまったのだ、この男の得体の知れなさに。そんなことを知ってか知らずか、ツギハギは続けた。

「俺は世界平和でも戦争根絶でもなく、ただ間抜け顔でシンバルを叩く猿が見たいから、ゼンマイを巻くんだよ」

クリスは何も言えなかった。その言葉の意味はきっとわからないし、また彼女はきっと理解したくもないだろう。

「――皿が空いたな。そろそろケーキを持ってくるよ、食べるだろ?」

「……ああ」

先程から変わらず柔らかい物腰で、ツギハギはクリスにそう聞いてから席を立った。クリスは、彼のことが決して嫌いなわけじゃない。いつもどんな時でも今のやりとりのように優しく接してくるし、彼女がフィーネに〝痛み〟を与えられた時も――それを面白がっているふしはあるものの――ツギハギは気にかけ、手当てをしてくれる。しかしだからこそ、クリスは彼が見せるその言いようのない得体の知れなさが、酷く恐ろしかった。

「ああそうだ。さっきの話なんだけどさ」

ケーキを2つもってきたツギハギは、それを2つともクリスの近くに置きながら、彼女にそう聞いた。

「……気になる女の子が――って話か?」

「ああ、どう思う?」

「知らねえよ。相手の興味があるもんでも調べろ」
「――ああ、なるほど、それだな」
彼はそういうと、〝どこからともなく〟普遍的な使い捨てマスクを手に取り、顔に付けた。
「なんだよ、どっか行くのか？」
「ああ」
ツギハギは、裂けた口の口角を上げた。
「まずはゼンマイの場所を探さなきゃ」
そう言って、彼はその場からきれいさっぱり消えた。

Number. 03 Vide Cor Meum

「あ、ツギくん、おはよー！」

朝の通学路で、響はツギハギに会った。場所は初めて会った時と同じ、猫を助けたあの場所だ。響は自分の声に反応して、ゆっくりと振り返るツギハギを見て、にっこりと笑った。

「――ああ、おはよう。朝から元気なことで」

「ツギくんが元気なさすぎなんだよ。もっと張り切ってかなきゃ」

「張り切ってるさ、夜はね」

「さては夜更かししてるなー？」

そうやって再開した二人は、とりとめのない会話をしながら通学路を歩いてゆく。会

話は主に響きが話しかけ、ツギハギが答えるものだった。内容はなんてことのない、お互いのプロフィールだ。好きな食べ物は何か、どの辺に住んでいるのか、といったもので、特に話が続いたのは音楽のことだった。

「へえ、風鳴翼が好きなんだ」

ツギハギがそう聞くと、響は待ってましたと言うように答えた。

「もう大好き！　曲がいいのはもちろんだけど、かっこいいしキレイだし、大ファンなんだー。今日だって学校が終わったら新発売のＣＤ、真っ先に買いに行っちゃうんだから」

「ＣＤってことは、あそこのＣＤショップかい？」

これまでの会話の中で一番、ツギハギは響の話に食いついた。

「え、知ってるの？　もしかして、ツギくんも音楽好き？　って言っても、この辺にＣＤショップなんて、あのドラッグストアの向かいのやつしかないけどさ」

「ああ、音楽はよく聴く」

「へええ、どんなの？」

「どんなのって言われても、〝レディオヘッド〟とか、〝ティアーズ・フォア・フィアーズ〟とか、ああいうの」

「おお、洋楽かー。私も聞いてみようかなー」

響はそう言って、あごに手を当てて考えるそぶりを少ししした後「そうだ！」と手を叩いた。
「じゃあ今日の放課後、もしよかったら一緒にＣＤショップに行かない？　私の友達も来ると思うから、３人で！」
響は相変わらずの快活な顔で、ツギハギの顔を覗いてそう聞いた。しかしそれに対しツギハギは、「ゴメン」と答えた。
「今日はちょっと用事があってさ、時間がないんだ」
「あちゃーそっかー……じゃあ仕方ないよね」
響は肩を落とし、わかりやすく落ち込んだ。これを機に、猫の時のお礼もできると考えていただけに、余計に残念なようだ。それを見てツギハギは少し間をあけてからこう言った。
「でも、今度の週末は暇だから、その時にでも誘ってよ」
「……うん、わかった！　あ、じゃあ、連絡先交換しようよ」
響はそう言って、ツギハギに笑いかけた。響は携帯を取り出して、弄りだした。ツギハギもそれに倣い、自分の携帯を手に取った。
「――よし、これでいつでも連絡できるね」
「じゃあ、都合がついたら、連絡入れるよ」

二人はそう言い合って、お互いの携帯をしまった。そうやって歩いていると、いつの間にやら分かれ道まで来ていた。

「じゃあ、私こっちだから、またね！」

響にそう言われたツギハギは、無言で手を振り、彼女を見送った。そうして、辺り一辺には彼以外、誰もいなくなった。

「……さて」

彼は空を仰いで、ぼそりと呟いた。

「あの子はどこにゼンマイがあるのかな」

◇

——もう夕方にさしかかる時間に、あるドラッグストアに一人の男が入店してきた。中折れ帽子を深くかぶり、口にはマスクをしていて、顔が全く分からなかった。店員は

もちろん怪しく思い、その男をじっと見ている。

男は特に迷う様子もなく文房具がある棚へと向かい、すぐに商品を取り、店員のいるレジへと持って行った。持ってきたものはどうやら、一般的なボールペンのようだった。

「……２００円になります」

「ああ、店員さん。パッケージをここで捨ててもらってもいいですか？　すぐ使うんです」

そう言って男は、１００円玉をぴったりと2枚店員に渡した。それを確認すると店員は「構いませんよ」と言い、包装を剥がし、裸のボールペンを男に渡した。考えすぎか？　店員がそう考えたとき、男は言った。

「……あの、店員さん。あれなんですか？」

「どうしました？」

「あれです、あの天井にある黒い、手の痕みたいな……」

「え、そんなもの――」

店員が男の指す上を見た、その時だ、店員ののど元に、ボールペンが深く深く刺された。

「――え？」

何が起こったのかわからない。そんな顔をしている店員に、男は言った。

「ああ、すいません、あれ実は俺の友達なんだ」

男はそう言って、マスクを外して、その裂けた口で噛って見せた。しかしそれに反応することも無く、口から血を吹きだして、斃れ、そしてみるみるうちに炭となった。

店員が吐き出した血を少しだけ浴びた男は言った。

「あー……しまった。なかなか落ちないんだよな、これ。洗剤のストック、まだあったっけ？」

男は、ツギハギはそう言って、先程の黒い手痕めがけて、血まみれのボールペンを放り投げた。するとボールペンは、きれいさっぱりと消えた。

「さーて、響は気に入ってくれるかな？〝ホラーショー〟ぐらい楽しんでほしいね」

ドラッグストアからゆっくりと出ながら、ツギハギは中折れ帽子を深くかぶり直し、そう言った。

結局、彼が言っていた〝友達〟は、その姿すら見せず、ただその天井にあった手痕は、

いつの間にかなくなっていた。

Number. 04

聖リディアンからモノレールでしばらく揺られた先、そこからさらにストリートを抜けた先に、立花響が目当てにしているCDショップがあるわけだが、今夕方のこの時間、CDを売ってくれるような気配はなかった。何と言っても、ショップの店員が全て炭になってしまっては、売れるものも売れないのだ。

曲がり角を曲がった響は、その光景を見て立ちつくした。そこら中に落ちている人間大の炭を見つめる。このような場所で、焦げ臭さが少しもしない、ぐずぐずな炭が転がっているとなれば、彼女が考えられるものはひとつしかなかった。

「ノイズ……！」

彼女がそう呟いた直後、子供のような悲鳴が聞こえた。響は踵を返してその声がした方へと振り向いて、走り出す。見るとそう遠くない場所で、幼い女の子が、まるでゼリーのような色をした化物に襲われていた。あのお道化たような化物こそが、人を炭に変えると言われる、〝ノイズ〟なのだ。

Number. 04 I'll Keep Coming

――子どもの手を引いてノイズから逃げる響を、建物の屋上からツギハギは見ていた。しかしその顔は酷くつまらなそうであり、先程のはしゃぎようは見る影もなくなっ

ている。ツギハギは振り向いて、誰もいない場所に向かって言った。

「最悪だ、ああ最悪だ。余計なことしかしないんだぜ、あのオバハンはさ」

響を追いかけているあの大量のノイズたちは、実はツギハギが手配したものではない。ツギハギのやっていることを察知したフィーネによるものだ。フィーネがなぜ今この場所に、ノイズを放ったのか。それをツギハギは知る由もないが、そもそもそんなことは彼にとってどうでもいいことだった。今の彼は、ただただおもちゃを取られた子供の用にへそを曲げちまっていた。

ツギハギは響の方に向き直した。見ると、川沿いの道へ出ていた。目の前には川、そして響は横の方へと走ろうとするが、両側にもノイズがいて、挟まれていた。後ろからもノイズ、横にもノイズ、目の前は川。八方ふさがりだ。

さてここからどうするのか、ツギハギはそう思いながら見ていると、なんと響は子供を抱えて川へと飛び込んだ。

「ほお、すごいすごい」

ツギハギはゆっくりとわざとらしい拍手をしながらそう言った。川に飛び込んだこと自体ではなく、あの土壇場で子供を見捨てず、すぐに川に飛び込むあの度胸と慈悲に、彼は称賛を送ったのだ。

そこで彼はある考えに至った。彼女らに見つからないよう、ついていってみようと

思ったのだ。ひょっとしたら、彼女はあの大量の”ゼリー寄せ”から逃げ切れるかもしれない。そう思って、彼は思わず顔をほころばせた。

「かわいいなぁ響、すごくかわいい。ハハハ」

彼はそう言って、歩き出した。

◇

「状況を教えて下さい！」

大急ぎで駆けつけてきた風鳴翼はそう言った。物々しく、まるでロボットアニメに出てくる指令室のようなその場所は、司令官である風鳴弦十郎を中心に、大勢がせわしなく動いていた。

「現在、反応を絞り込み、位置の特定を最優先としています」

コンソールを動かしている男がそう言った。モニターには赤い円のようなものが大量に映っており、しかしその中にひとつ、ノイズではなく、ある死体を映していた。それを見て、弦十郎の隣にいた、ドクターの櫻井了子は聞いた。

「あそこに〝口裂け男〟が出たのね？」
「――！　桜井女史！　そいつは……」
その名前を聞いて声を荒げる翼に、了子の代わりに弦十郎が答えた。
「翼、今はまだ動くな。いいな？」
その言葉を聞いて、翼は抑えきれないように歯を食いしばった。それを少し落ち着かせた後、翼は弦十郎にこう聞き返した。
「……おじさま、〝口裂け男〟が何者か、わかりましたか？」
「いや、観測した場所を見たが、既に姿はなかった。――ただ、近辺の住人の何人かが、不審な死に方をしているのを確認した。おそらく、ノイズが来る前に奴がやったのだろう」
「炭にする前の余興ってとこかしらね」
了子はモニターを見ながらそう呟いた。
「了子君」
弦十郎はそれを窘めるように了子の名を口にした。聞いていた翼は、爪が食い込むほど強く、拳を握りしめていた。
彼らが所属している特異災害対策機動部二課の間で、しばらく前からある男が話題に上がることがしばしばあった。〝口裂け男〟と呼ばれるそれは、ノイズの出現と共に現

れる、正体不明の人物である。現れては猟奇的な殺人を繰り返しており、この不可解な行動から、このノイズの異常な出現率と何かしら関連があるのではないかと言われ、マークすることになったのである。しかし、身柄の拘束はおろか、その顔すら見ることができていないのが現状だった。反応を見つけたと思っても、そこにはすでに彼が施した死体が置かれているのみであり、どのように逃げたのかすらもわからないので、本当にそんな男がいるのかという声すら、二課の中であがったほどである。この”口裂け男”という名前も、奇跡的に生き残った生存者が見たという情報からつけられた、いよいよもって都市伝説のような名前なのである。

「……翼、落ち着け。目的を見失うな」

「……心得ています」

弦十郎に対して翼はそう言うが、その内心は当然のように穏やかではなかった。先日の一課全滅の騒動は、あの男の仕業ではないかという話が二課で上がってから、翼は口裂け男を特段憎むようになった。

彼女は憤りに満ちており、しかし今は動くこともできず、ただ震えて拳を握っていた。

◇

子どもを連れて逃げながらどれほど経った頃だろうか、気づけば辺りがすっかり日が沈む中、響たちは巨大な工場施設に逃げていた。屋上に向かっているのだろう。彼女は子供を背負い、やっとの思いで長い梯子を上っていた。

響は梯子を登り切り、子どもを降ろしてから仰向けに寝転がり、ぜいぜいと息を吐いた。

「死んじゃうの?」

同じように倒れて息を吐く子供は、不安そうに響にそう聞いた。それに響は何も言わず、けれど優しく目を細め、首を横に振った。——そんな時だ、パチ、パチ、パチ、そんな手を叩くような音が連続して聞こえた。

「やあ、やあ、やあ。良く生き残ってくれた」

響が音のした方を見ると、そこにはツギハギが立っていた。そのわざとらしい拍手をする彼に対して、響はその裂けた口に驚いたものの、すぐに息を整えて言った。

「あ、あなたは?」

その言葉を聞いて、ツギハギは頭に疑問符を浮かべたが、自分の恰好を思い出し、すぐに合点がいった。響の前では隠していた顔の下半分が今は露出していて、変わりに響

の前で出していた顔の上半分が、中折れ帽子で隠れてしまっている。今は声もマスクでこもっているわけじゃないし、服もさっき血がついてべとべとになってしまったので着替えてしまった。つまり、響が知ってるツギハギと判断するには、少々判断材料が足りないのだ。

「ああ、いやおれは――」

ツギハギは特に隠す理由もないので、彼女に正体を明かそうとしたが、すんでのところでやめた。彼は考えた。もし、ここで正体を明かしたら、少なくとも自分がこれから、響の目の前で行うことを考えると、今度一緒に遊ぶという約束が流れてしまう可能性がある。それはツギハギとしては避けたいところだった。

そしてさらに考えた、彼女が今後親交を深めるであろうツギハギが、〝今後憎むであろう〟目の前の男と同一人物だと知った時はどう思うだろうか？　彼はそれに酷く興味を持ってしまい、そのために今は正体を明かすまいと決めた。果実が熟すのを待つことにしたのだ。

「――俺も逃げてきたんだよ。あの商店街からさ。生きてる人がいて安心した」

「じゃあ、他に誰か生きてる人は……」

「それは……」

彼は言いあぐね、そして響の隣で、怯えた様子で彼を見ている子供を見てから、言っ

た。

「そう言えば、一緒に逃げてる人に、子どもとはぐれたって言ってた女の人がいたな、ちょうどその子ぐらいの歳の女の子だって」

「お母さんだ！」

それを聞いて、子供の顔は喜びに満ちた。それは響も同じようで、そのまなざしには期待と希望があった。響は男に聞いた。

「どこにいるんですか!?」

「あっちの塔屋の中にいる。一緒に行こう」

「うん！」

三人は塔屋へと向かった。その途中響は嬉しそうに男の方を見た。

「ありがとうございます。あの子のお母さんを助けてくれて」

「……別に助けてなんかいないさ」

「え？」

その言葉に響は疑問を持ったが、それを声にする前に、彼は前を走っている子供に近づいていった。そうしている間に塔屋の扉の前に着き、子供は言った。

「ここにお母さんがいるの？」

「そうだとも――ああでも、お兄さんが先にお母さんと話をするよ、いいかい？」

「ええ、どうして？」
「さっきまでノイズに追われていたんだから、いきなり扉が開いたらびっくりしちゃうだろ？　お兄さんがまず、大丈夫だって言うから」
「……わかった」
子供はしぶしぶと言った感じで、彼を前に行かせた。そんなやり取りを見て、響はあることを思い出した。冷静になって考えてみれば不思議なことだ。考えてみれば〝あまりに不自然なこと〟なのだ。響は聞いた。
「そう言えば、なんで私たちが商店街から逃げて来たって、知ってたんですか」
「それはね、ずっと見てたからだよ、響」
「え？　なんで、私の名前――」
そう言い切る前に、彼は塔屋の扉を開けた。中には、子供の母親がいた。顔以外すべてが炭と化した。子供の母親がそこにいた。
「――え？」
子どもも響も、何が起こったのかわからないという顔をしている。そんな中で、炭になりかけていた、子どもの母親がやっとのことで口を動かした。

――ニ、ゲ、テ

母親は口を動かすと、涙を流しこと切れた、そして最後に残った顔すら炭になり、ぐずぐずにくずれ、それが子どもの顔にかかった。

「お、母さ……いや……」

子供は声にならないような叫びをあげながら、母親だった炭に抱き着いた。それを見て、ツギハギは先程と同じように、パチパチと惜しみない拍手をその親子に送った。響は困惑した。これはなんだろう？　どうしてこんなことになったんだろう？　なんであの人はあんなに嬉しそうにしているんだろう？　響はツギハギの方を見た。それに気づいた男は言った。

「さて、さて、さて、そろそろ物語も分岐点だ。こっからどうするかが重要だぜ？」

そう言って、彼は炭にしがみついて泣きじゃくる子供を引っぺがし、その頬に、どこから取り出したか、ナイフを突きつけた。響に見せつけるように、そうした。

「――なんで？」

「ここからだよ響、ここからなんだ。楽しいか楽しくないかはここからが全てなんだよ」

響の言葉にも答えず、彼は愉快そうに裂けた口をつり上げる。響はナイフを突きつけられている子どもを見た。

「ごめんね、お姉ちゃん」

響は、心が折れかけている子供を見て、思った。
――諦めちゃダメだ。まだ折れちゃダメだ。
――諦めないで
――生きるのを諦めないで
そして、ツギハギはナイフを振りかざした。

Balwisyall nescell gungnir tron

光が起こった。眩しいほどの光が。それを見て、ツギハギはナイフを落とし、子どもを突き放して、その光景を独り占めだと言わんばかりに見つめていた。

「……ハハハハ、スゲエ」

ツギハギが新しいおもちゃを貰った子供の用にはしゃいでいる。そうこうしているうちに光が晴れる。すると、先程とは様子がまるで違う響が現れた。何やら機械のようなものが体から次々に這い出てきて、そしてそれが出る度に響は人ではないような叫び声をあげる。それがひとしきり終わると、響はゆっくりと立ち上がった。まるでヒーローコミックに出てくるような、オレンジ色のコスチュームを身にまとい、男の前に立ちはだかった。

「――そう言えば、なんでって言ってたな、さっき?」

ツギハギは心底嬉しそうに響にこう言った。

「知ってるはずさ、響。知ってるはずなんだよ、君は。だって、君が人助けをする理由と、寸分違わず一緒なんだから」

Ｎｕｍｂｅｒ．０５

響は自分の手、そして次に首から下の自分の身体を見た。その四肢はオレンジ色の鎧で覆われており、彼女はそれを見て唖然とした。

「な、なにこれ……私どうなって……」

「お姉ちゃん！」

何とか逃げてきたのだろうか。呆けている彼女のところに、あの子どもが駆け寄ってきた。響はまだ状況に追いついてはいないものの、自分を頼ってくるその子供を見て、ひとまず自分のなすべきことを、一つだけ確信した。

――よくわからないけど、確かなのは、私がこの子を助けなきゃいけないってことだ。

Number. 05 Sincerity is Scary

彼女は、子どもを自分の背に隠し、そして自分の目の前にいる男を見つめた。その男は――ツギハギはその様子を見て、大仰に手を広げた。

「素晴らしいよ。君もそのイカれたコスプレができるとはな。今日はなんて良い日だ」

その異様にはしゃいだ彼の言葉から、響は自分のこの鎧について、何か知っていることを察した。しかし彼女は今はそんなことはどうでもよく、それ以上に彼女には、彼に

聞かずにはいられないことがあった。
「お母さん……」
「ん?」
「どうして、この子のお母さんを殺したの?」
彼女の視線には、ツギハギに対する憎しみはまだなく、しかし怒りと敵意と——そして悲哀が満ちていた。その視線を浴びながらツギハギは、一歩ずつ、響の方にゆっくりと近づきながら、言った。
「……なんでそれを聞く? 理由が欲しいか。〝実はあの母親は俺の実母で、俺を捨てた恨みに嵌めてやったのさ〟って言えば、君はじゃあしょうがないって言って帰るのかな?」
ツギハギはケタケタと引き笑いをした。それを見て、響は拳を握りしめる。彼はなおも続ける。
「それとも、〝女の死に際を見るのが楽しいから〟とでも言って、俺を思い切りぶん殴るための正当性ってやつを貰った方が嬉しいかな? ハハハ」
それを聞いて、響の中の何かが切れた。彼女はツギハギに向かって、力いっぱい地面を蹴った。しかし、それがいけなかった。
「え!?」

走り出すつもりが、〝突進していた〟。彼女の地面を蹴る力が強すぎたために、彼女はそれこそ矢か銃弾のように、ツギハギに突撃していった。しかし、ツギハギには当たらない。彼が避けたのか、いや、彼女が明後日の方向に飛んだだけのことだ。彼女は設置されていた貯水タンクに激突し、苦悶の声をあげた。その反動で貯水タンクが爆ぜ、中の水が雨のように降り注いだ。

「う、ぐ……」

衝撃は凄まじいが、あのスーツの力か、彼女はほぼ無傷でゆっくりと立ち直った。

「……どうやら、まだ操作がおぼつかないらしいな」

ツギハギは、奥の方にいる子供を見た。子供はツギハギと目が合い、まるで蛇に睨まれた蛙のように怯え始めた。

「お嬢ちゃん、逃げてもいいけど、邪魔だけはするなよ？　なあに、殺したりはしないさ」

そう言って、彼は最早、全く興味を失くしたかのように、その子供との会話を終わらせた。彼は再び響の方へ振り向き、彼女の元へと歩いていく。そして2メートルにも満たない距離に来た時に、彼は言った。

「それで、どうする？」

「……何がそんなに面白いんだ」

そう聞く響を、ツギハギは見つめた。その顔は酷く怒りに満ちたような瞳で、彼を見

つめ返していた。二人はさらに近づき、視線が混ざり合う。ひとしきりツギハギの顔を見たあと、響は続けた。

「命を踏みにじって、命を弄んで、そんな風に笑うな！」

彼女はそう叫んで、彼の胸ぐらを掴んだ。顔を引っ張りよせるが、宵闇の暗がりと、中折れ帽子のせいで、その裂けた口以外がよく見えない。けれどそんなことは彼女は歯牙にもかけていないだろう。今の彼女は義憤に満ちており、それどころではなかったのだから。そんな彼女をあざ笑うかのように、ツギハギは言った。

「笑うさきっと、誰だって笑うね」

「そんなはず――」

「笑うね、〝君もあの子も〟」

食い気味にそう言ってから、その裂けた口をツギハギは心底可笑しいように歪ませる。それを見た響は戦慄し、一瞬、ほんの少しだけ、反射的に胸倉をつかむ手の力を緩めてしまった。ツギハギはそんな響を見ながら、続けた。

「誰だって笑ってるぜ。誰かが死んだとき、何かが壊れたとき、それが自分に無関係だってわかったとき、〝ああよかった〟って言って、グチャグチャの死体を見てケラケラ笑ってるじゃないか」

中折れ帽子から、ツギハギの眼が片方だけチラリと見えた。響から見てそれは、暗く

てほとんど見えないが、しかしその瞳に映る彼女自身の姿を見せた。そこに映る響は、揺れていた。ツギハギはそれを見て尚も笑いながら、彼女に言った。

「君は俺を死体にできたら笑えるだろう、響?」

「笑えるわけない」

しかし響は、間髪入れずにそう言い放った。それを聞いたツギハギは、おそらく驚いたのだろう。帽子の下で目を見開いて、口を噤んだ。

「誰かが死んで、笑顔になんかなれるはずない。そんな風になっちゃう前に、私はその誰かを助けたい」

「それが例え、あなたでも」

響は、少しだけ涙目になりながら、そう言ってツギハギを見据えた。それに対してツギハギは、何を思ったのだろうか。それはわからないが、兎にも角にも、彼は非常に珍しく、面食らったような表情で、こう言った。

「……イカれてるな」

彼はまるで、噛みしめるかのようにそう言った。そう言って、何秒ほど経った頃だろうか。遠くからエンジン音のようなものが聞こえた。

「何?」

響もそれに気づき、音の方を振り向く。そしてその直後、ある〝唄〟が、鈴のような声が、遠くから聞こえてきた。

Imyuteus amenohabakiri tron

その歌声と共に、二人の前に、ある少女が現れた。青い鎧と、そして、冷たくなるよ

うな剣を携えた、風鳴翼が、そこに現れた。
「翼、さん……なんで……」
「おいおい、いいところだったんだぜ」
響とツギハギはそれぞれ違った反応を翼にするが、そんなことはお構いなしに、翼はツギハギを睨みつけ、言った。
「会いたかったぞ、〝口裂け男〟」
「へえ、そりゃ光栄だ。そうだ、サイン貰えないかな？　うちの仕事仲間に自慢したいんだ――」
言い終わる前に、翼は目に見えぬような速さで、ツギハギに斬りかかった。
「――何だと？」
しかし、何かを斬った感触は、翼はまるで感じることができなかった。刃は空を切り、ツギハギはいつの間にか、翼の真後ろにいたのだ。
「怖いな、イライラは美容に悪いぜ？」
ツギハギはそう言いつつ、屋上から下を見る。すると、何やら一般人のものではないであろう車が、続々と集まってきているではないか。彼はそれを見て、頭を無造作に掻いた。
「……名残惜しいが、今日はこの辺でお開きかね」

そう言いながら、ツギハギは策の上に登って、まるでブロードウェイの観客でも見渡すように、両手を広げた。

「――！　待て！」

それに何かを察したのだろう、翼はツギハギに猛スピードで距離を詰める。しかし、そんな翼に目もくれず、彼は響の方を見て、言った。

「また遊ぼう、響！　俺のダーリン！　ハハハハ！」

彼は狂人のように笑って、柵から飛び降りた。翼は急いで下の方を見たが、そこにはすでに、誰もいなかった。

◇

「あったかいもの、どうぞ」

「あ……どうも」

十数分ほど経った頃、先程までいざこざがあった工業区域は閉鎖され、中では政府の人間と思しき人たちが、右へ左へとせわしなく動いていた。響はそんな中にいて、わけ

もわからず、ただ温かいコーヒーを貰っていた。

響を纏っていたオレンジ色の鎧は、あの後光の粒となって消え、彼女は聖リディアンの制服に戻っていた。結局あれが何だったのかは、響自身わからなかった。

「……じゃあ私、そろそろ帰らせてもらいますね」

憧れの風鳴翼に会えたにも関わらず、響ははしゃげるような気持ちにはとてもなれなかった。人が死ぬ瞬間を間近に見てしまっては、少なくとも、無邪気にはしゃぐことなど、彼女には出来ようもなかった。

「……あなたをこのまま帰す訳にはいきません」

「え？　な、なんでですか？」

響がそう聞いた直後、彼女は黒服の男たちに囲まれた。響が困惑しているのもお構いなしに、翼は続けた。

「特異災害対策機動部二課まで、同行してもらいます」

「そ、そんなこと言われても――」

何が何だかわからない、彼女がそう思っているその時、彼女は、視界の端に、〝あるもの〟を見た。

「……お、母さん？」
「ああ……良かった、無事だったのね」
「お母さん！　お母さん！」
さっきまでいたあの子どもが、〝母親を殺されて〟泣いていたあの子どもが、〝母親〟に抱き着いて、泣きじゃくっていたのだ。
「え？　え？　なんで……だって……」
「どうしたの？」
響の様子に疑問を抱いた翼が、そう聞いた。響はそれにしどろもどろになりながら答えた。
「あ、あの、私見たんです、あの口が裂けた人が、あの子のお母さんを……殺すところを……」
思い出してしまったのか、響の声は後半になるにつれて小さくなっていった。それを聞いた翼は、神妙な顔で答えた。
「……あなたが何を見たのかは知らないけれど、あの男が殺害した人の中に、あの子の母親は入ってないわ。背格好や顔だちが似た人は、数人いたらしいけど」
「何を考えて……」翼は忌々し気にそう吐き捨てた。それをしり目に、響は再びあの口

裂け男のことを思い出していた。

なんであの人はあの子の母親を狙ったの？　無関係な人をあんな風に炭にしたのは、単純に間違えたからなの？　そもそもなんで、あの人は私たちにあんなことをしたの？

考えれば考えるほどわからなく、頭がどうにかなりそうだった。まるで狂気に呑み込まれていくような感覚に恐怖を覚え、響は一旦考えるのをやめた。そんな時だ。あの子どもが、響に近づいてきた。泣きはらした眼をして、しかしその顔は笑顔だった。

「お姉ちゃん、助けてくれてありがとう」

「……うん、良かったね、お母さんにあえて」

「うん！　ホントによかった！」

「死んじゃったのが、お母さんじゃなくて、ホントによかった！」

その子供にきっと、他意はないのだろう。きっと純粋に母親との再会に喜んでいるのだろう。しかしそれでも、響はその言葉を聞いた途端、あの男の言葉を思い出してしまった。

――誰かが死んだとき、何かが壊れたとき、それが自分に無関係だってわかったとき、
”ああよかった”って言って、グチャグチャの死体を見てケラケラ笑ってるじゃないか

「お姉ちゃん？」

子供の心配そうな声を聞いて、響は我に返った。

「あ、うん……なんでもないよ、大丈夫！」

「……ごめんなさい、そろそろいいかしら？」

子どもとのやり取りをする響に対し、翼はそう言った。そろそろというのは、先程話していたことだろう。響はそう察し、今は素直に従うことにした。

「じゃあ、お姉ちゃんはもう行くね」

「うん、ばいばい！」

その子はそう言って、響を離れ再び母親の元へと戻っていった。

「では、行きましょう」

「はい……」

響はそう言って、翼たちと共に歩き始める。響はもう一度、あの母娘の方を見た。

見ると、その子は顔にかかっていた、先程まで母親だと思っていた炭を、満面の笑みで、本当の母親に拭いてもらっていた。

Number. 06

あの騒動から、数日ほど経った。日が全くに沈み切り、暗くなった湖畔には、ボート用だったと思われる古びた、実に簡素な停泊場が細長く突き出ている。フィーネの洋館のそばにあるその場所は、雪音クリスのお気に入りの場所であり、彼女はよくここに一人で来ては、そのすべてを吸い込むような暗い湖を眺めていた。そして今この時も、彼女はそこに立っていた。

「――湖っていうのは、その大量の水で、全てを断絶するらしい」

前やってたゲームにそう書いてあったぜ。まるで子どもが知識自慢をするようにそんなことを言う声が、クリスの鼓膜を触った。クリスは今は一人ではない。彼女が苛立ったようにその声がした方を見ると、口が耳まで裂け、中折れ帽子を被った男がいた。ツギハギだ。

「んだよ、帰って来るなり……いちいち言うことが意味わかんねんだよ、お前は」

クリスは文句を言うが、彼は全く歯牙にもかけないように、何も言わずクリスの隣に立った。その時彼は、クリスのように湖を見てたのではなく、月明りもない、真っ暗な空を見ていた。数分ほど経った頃だろうか、さきに沈黙を破ったのは、クリスだった。

「――フィーネから、新しい指示が来た。〝立花響〟の確保だ」

彼女がそう言うと、ツギハギは無表情で、目だけを彼女の方に向けた。

「それ、捕まえてどうするわけ？」

彼はそのまま言った。その質問に、クリスは内心、少しだけ驚いた。彼がフィーネの指示の目的を――すなわちフィーネのやろうとしていることに興味を示したことは、これが初めてだったのだ。クリスは呆けていたのだろう、そうしているうちに、彼はクリスに近づき、その二つ結びの髪の尻尾を掴み、あろうことか投げ縄のように振り回して弄りだした。

「クリス？　クーリース！」

「ああもう、やめろ！　――知らねえよ、でもフィーネは、これも戦争を無くすために必要なことだって言ってた。だから、やるしかないんだ」

「……へえぇ、そう」

そう言うと、ツギハギはクリスの髪を放し、実に抑揚のない声でそう答えた。クリスはいよいよ彼に違和感を覚えた。いつもなら奇妙な引き笑いと共に、皮肉なりからかいの言葉なりをかけてくるのだが、今回はそれがない。そんな彼は、彼女の心情を無視するかのように、話を続けた。

「それで？　それを君がやんのかい？」

「当然だろ」

そう言いきったが、しかしクリスの表情は忌々しいとでも言うかのようだった。彼女は続ける。

「確保となりゃあ、真正面からの殴り合いになる可能性が高い。お前じゃ到底無理だ」

「殴る蹴るなんて俺も〝俺の友達〟も趣味じゃないね。ユーモアさの欠片もあったもんじゃない。出来たってやってなんかやるもんか」

彼は実に退屈そうにそう言い放った。事実、彼は装者のような強大な力を持っているわけではなかった。

彼には〝友達〟と呼んでいる名状しがたい何かが憑りついてはいるが、その〝友達〟の力を使ったとしても、出来ることはせいぜい不意打ちや搦め手程度で、クリスが言う真正面からの戦いには到底対応できない。彼は装者に対して逃げたり嫌がらせをすることはできても、真っ当に勝負することなど到底できないのだ。

「……なあ、ずっと思ってたけど、本当になんなんだ、お前のその……〝友達〟ってのは？　ノイズの類じゃないのか？」

「さあ？　俺も知らない」

クリスの言ったことに、彼はそう答えた。クリスが彼の〝友達〟について今わかっていることは、少なくともノイズのように人を炭に出来るが、性能はノイズよりはるかに

低いこと。死体でないと炭に出来ないので、殺害はツギハギ自身が行う必要がある。そして物体を取り込むことができ、人間大程度の物なら自由に出し入れできること。この2点が、少なくとも間違いなくあると言える、〝友達〟の特性である。「それにしても」とツギハギは言ってから、続けた。

「何の罪もない女の子を拉致とは、ずいぶん酷いことをするじゃないか。俺からしたって冷酷だぜ」

そう言って彼は、わざとらしくそっぽを向き、手をクリスの前でひらひらと躍らせてみせた。

「……面白半分で人を殺しておいて、よく言えたもんだな」

「冗談さ、真面目だねえクリス。そんなに真面目ばっかりだと、今におかしくなっちまうぞ?」

「知ったこっちゃねえんだよ」

クリスはそう彼に言い、湖の岸の方へと歩いていった。

「……気に喰わねえ」

クリスは一拍だけおいて、続けた。

「気に喰わねえんだ。ああいう奴は」

彼女はそう言って湖を去っていった。それを見届けたツギハギは、少しだけ肩をすく

め、そして今度は、もはや宵闇で湖と空の境目が曖昧になった、真っ暗な場所を眺め始めた。

Number. 06 Take on Me

立花響は追試を免れるためのレポートを、しかし全く手を付けられずにいた。原因は大きな眠気と、そして不安。

「響、寝たら間に合わないよ?」

未来にそう言われ、響は閉じていた瞼を開ける。しかし効果は一杯のコーヒーほどは望めないようで、彼女はまたうつらうつらと船をこぎ出した。

「……最近なんか疲れてるみたいだけど」

明らかに通常よりも疲労の色が濃い響を見て、未来はそう聞いた。

「へいき……へっちゃら……」

「へっちゃらじゃないよ……」

未来の声を聞き、それでも眠りこけてしまう響は、ここ数日のことを思い出していた。

——彼女はあの騒動の後、特異災害対策機動部二課に連れてかれ、諸々の説明を受けた。自分が”シンフォギア”という、ノイズに対抗する力を偶発的にとはいえ手に入れ、”適合者”と呼ばれる存在になっていたこと。あの風鳴翼もその適合者であったこと。……そして今日会った、”口裂け男”のこと。会話の内容は、こういうものだ。

『シリアルキラー？』

『そうだ』

　響の言葉に、弦十郎は答えて、より詳しく続けた。

『ここ最近現れた無差別連続殺人犯でな。本来なら警察の領分なんだが、コイツが現れる場所にはほぼ毎回、ノイズが大量に出現する。そのことから、一連のノイズ災害の首謀者である可能性が高いとされ、二課（俺たち）にお鉢が回ってきたわけだ』

『動機もルーツも全てが不明。災害場所に現れては人を殺して跡形もなく消えるから、一部じゃ亡霊なんじゃないかって噂も出ているわ』

　弦十郎の言葉を補足するように了子が話す。『亡霊……』響は茫然とその言葉を確認するように声に出した。

『だが今日、奴は実体のある人間だということがわかった』

　弦十郎はそう言って、その場にいる翼を見た。その行動の意図を察した翼は、しかし何故か響の方を見ることをせず、話し始めた。

『〝口裂け男〟は、細身で身長が１８０前後。顔が帽子で隠れていたのではっきりとは言えませんが、声から察するに、２０代前半……下手をすれば１０代後半の男性で、そして……口が耳まで裂けて、それを糸か何かで大雑把に縫い付けていました。』

『うむ。そして奴は、響君……君と、また接触しにくる恐れがある』

『ふぇ？　な、なんでですか？』

響はそう言ったものの、しかしすぐに思い出した。彼が去り際に、引き笑いをしながら、自分に言ったことを思い出した。

――また遊ぼう、響

彼女はあの口を思い出して、恐怖からか、息をのんだ。

『……こんなことを、君に頼むべきではないのだろうが』

そう言って弦十郎は、重苦しくその先を話した。

『人の身でノイズに触れることは、すなわち炭となって死ぬことを意味する。そしてまた、ダメージを与えることも不可能だ。たった一つの例外があるとすれば、それは、シンフォギアを身にまとった戦姫だけ……〟口裂け男〟がそんなノイズを操っている限り、奴の凶行はその例外にしか止められないだろう――日本政府、特異災害対策機動部二課として、改めて協力を要請したい』

そして彼は、真っ直ぐと響を見据えて、言った。

『立花響君。君が宿したシンフォギアの力を、対ノイズ戦に、そして、〟口裂け男〟を止めるために、役立ててはくれないだろうか』

弦十郎は、酷い罪悪感に苛まれているような眼で、響にそう言った。響はそんな彼を、しかしあまりに純粋で真剣な眼で見た。

『……私の力で、誰かを助けられるんですよね？』

その言葉に、弦十郎はただ静かに、しかし力強く頷いた。

『わかりました！』

響は大きな声でそう言った。その言葉を、部屋の隅で聞いていた翼は、彼女に対して、怒りとも悲しみともつかないような感情を、目に宿らせていた。

――響は机に突っ伏して、再びあの口裂け男のことを考えた。きっと何か理由があるはずだと思った。人があのような凶行に走るのには、きっと、酷く辛い理由があるはずだと、彼女はそう思った。それはきっと――ここでは詳しいことは書かないが――彼女もまた、凄惨な経験をしているからこそだろう。

――必ず、止めなきゃ

そう思いながら、また瞼を閉じた。結局その後も、眠っては未来に起こされを繰り返した。

そういえば、と彼女は思った。そういえば、口裂け男は、どこかに潜伏している可能性があると、二課で言われた。そしてもしそうなら、口元をマスクか何かで隠しているはずだ。マスクをした男に注意してくれ。とも。

マスクをした男。響には一人だけ心当たりがあった。しかし、〝彼〟だけは絶対に違うと、頭の中で断定した。助けてくれたあの人が、人など殺せるはずが無いと。

◇

暗い湖の上に、ツギハギはまだ立っていた。少し違うのは、その手に今携帯電話が握られていて、クリスに電話をかけている、という点だ。コールが一回だけなると、すぐにクリスは電話に出た。

『……なんだよ?』

「飼い主のワンコールで出るとはいい忠犬っぷりだよ、クリス」

彼がそう言うと、ぶつりと電話が切れた。しかし彼はそれを気にする様子もなく、再びクリスにかけ直す。そして彼女はまたワンコールも鳴り止まないうちに、電話に出た。

「いきなり切るなよ、びっくりしたなあ」

『なんなんだよ! 誰が忠犬だ誰が飼い主だ! お前ホントに一回ぶっ飛ばすぞ!』

「そう怒鳴るなって。携帯のスピーカ壊れちまうだろうよ。安物なんだぜ、これ?」

『うるせえ! あの女を捕まえに行かなきゃいけないんだ! 今お前に構ってる暇なん

て――』

「それなんだけどさ、俺も手伝うよ、クリス」

『……はぁ？』

電話越しにクリスはそんな素っ頓狂な声を出してしまう。しかしそんなことはお構いなしに、話を続けた。

「クリス、多分響を捕まえるとなると、あの風鳴翼も来るだろう。強敵だ、相手するには骨が折れるぜ？」

『んなこと、お前に言われるまでもねえよ』

「そこでだ、近いうち、風鳴翼様を特別ゲストとしてディナーに招待して、ちょっと説得でもしてみようかなと、当方は考えているわけです」

その芝居がかった言い方に、クリスはため息をついた。ああ、またコイツはわけのわからないことを言いだしたと。

『――お前バカか？　そんなこと、それこそできるはずないだろ』

「……まあ、とりあえず報告しといただけさ。クリスは変わらず、響を捕まえに行けばいい。こっちで勝手にやるさ」

『何がしたいんだ、お前？』

「君と響のキャットファイトを見たいだけだよ」

その言葉に、クリスは押し黙った。そして、彼は電話を切った。彼は再び湖畔を眺める。

「……あれ？　何だっけな、あの人の名前」

彼は少し困った。翼からその人についての話を聞いてみたいのに、名前が思い出せないんじゃ話にならないと。しかしその後すぐに思い出したようで、彼は手を一回、パチンと叩いた。

「思い出した。〝天羽奏〟だ」

そう言って彼は、ようやく今日初めて、少しだけ笑った。

Ｎｕｍｂｅｒ．０７

風鳴翼はここ最近、天羽奏の幻影を見るようになった。親友であり、共に戦った戦友であり、そしてもうこの世にいない人物だ。

決まって見るのは、あのライブの後のことだ。ノイズが大量に襲ってきて、奏と戦い、そして最後は奏が斃れ、灰になって、風と共にバラバラに飛び散る。そこまでのシーンが、同じ映画を何度もリピートするように、翼の脳内で流れることがしばしばあった。寝ていても起きていても同じことで、最早、囚われていると言ってもいいかもしれない。それは今も同じで、翼は脳内の〝再生〟が終わったのだろう。ゆっくりと瞼を開いた。

――全ては、私の弱さが引き起こしたことだ

彼女は狭く、簡素な和室で正座をして、一人でただじっと黙っていた。そして彼女は、おもむろにそばにあった刀を取り、そして引き抜くために右手を柄に添え、静かに言った。

「どこから入ってきた？」

月明りしか光源のないその場所に、影が〝二つ〟あった。ひとつは翼のもの。もうひとつは、翼の後ろにいる、〝ある男〟のもの。男は翼の質問にも答えず、ただこう言っ

た。

「……天羽奏」

「――何故その名を！」

翼は目を見開き、彼の方に振り向いた。しかし、そこで彼女が見たものは、誰もいない。ただ月光だけが差し込む部屋だった。

「？　これは……」

いや、部屋だけというのは少々語弊があっただろう。床の上に、小さな紙切れが置かれていたのだ。翼はその紙きれを慎重に掴み、そしてトラップの類がないことを確認すると、その紙切れに文字が書いてあることに気づき、それを読んでみた。

――風鳴翼様、貴方様お一人をディナーに招待いたします。貴方様と二人で、天羽奏様の思い出と、そして貴方様も知らない真実について語り明かしたいと思うのです。よろしければ明日、ぜひお越しください。

そんな文章が書いてあった下には、店の名前と住所、そして時間が記されていた。

「……奏」

翼はそれを見て、拳を握りしめた。この手紙を送ってきたのは、つまりつい先ほどこの場所にいた男は、十中八九あの口が裂けた男であろうことは、翼には容易に想像できた。声を聞いたのもそうだが、何より、このように人を愚弄するような真似をするのは、

あの男しかいないと断定したからだ。

「……何のつもりか知らないが――」

彼女はその紙切れをぐしゃぐしゃに潰して、言った。

「今度は逃がさない」

翼は誰もいない部屋で、ただ月明りを真っ直ぐと見た。その肩が、わずかばかり、ほんの少しばかり震えていたことには、彼女自身気が付くことはなかった。

Number. 07 Clair de Lune

こと座流星群が近いうちに見られるらしい、という情報は、つい先日、響が未来から聞いたものだ。これを2人で見に行こう、という約束をしたものなので、通学路を歩いている響は現在、なかなかに浮かれていた。

「何かいいことでもあったのかい？」

「うわぁ！」

そんな時に突然、後ろから声が聞こえたものなので、響はそんな素っ頓狂な声をあげてしまった。振り返って確認してみると、声の主は、マスクをつけたツギだった。

「お、おどかさないでよもー！　……でもなんか、ツギくんに会うの、久しぶりな感じするね」

「数日空いただけじゃないか」

「それでも、心配したんだよ？　何かあったんじゃないかって」
「たまたま会えなかっただけさ……。そっちはどうだい？　さっきも聞いたけど、いいことあった？」
「いいこと、というか、むしろえらいこっちゃというか……」
　響は言いあぐねていた。シンフォギアのことについて箝口令が出てしまった以上、何を言うこともできないのだ。それを知ってか知らずか、ツギは肩をすくめた。
「……ま、いいさ。誰でも話したくないことくらいある」
「ごめんね、本当は隠し事なんかしたくないのに」
「別に……そうだな、〝隠し事〟じゃなくて〝内緒話〟っていうワードを代わりに使うようにしてみたらどうだい？　少しはその……罪悪感って言えばいいのかな？　それも薄れるだろう」
「……アハハ、何それ？」
　響はその一瞬だけ、感じていた重々しい悩みも忘れ、脱力して笑った。彼の言葉には、何と言えばいいのか、的確なアドバイスをしているというわけでもないのに、それこそ彼の言った罪悪感とでも言えばいいのか。それを薄れさせて、気持ちを楽にしてくれる。そんな力があると、響は思った。
「それで？　じゃあなんであんなに浮かれていたの？」

思い出したように、ツギは聞いた。
「えー、そんなに浮かれてた？」
「ああ、わかりやすいったら」
「うう、恥ずかしい……」
響は羞恥心を振り払うように、大仰に手を広げながら言った。
「実はね、未来と流れ星見に行く約束したんだ。それが楽しみで楽しみで」
「流れ星？　狙って見れるもんなのかい、あれ」
「わかってないなあ、ツギくん」
ふふん、とでも言うように彼女は腕を組み、体をそらせた。
「こと座流星群が観測されたんだよー、予想では、明日の夜、見られるんだって！」
「へえ、知らなかった」
「おっと悪いけど、ツギくんは誘えないよ？　先に未来とデートする予定なんだから」
「ああ、別に星にゃ興味ないし」
「……そこまであっさりだと、それはそれで何だかなあ」
せっかく意地悪くいったのに、その甲斐もない。とでも言いたげに、彼女は頬を膨らませた。それを見ながら、ツギは脱力しきった声で言った。
「……まあ、その流星群の後でもいいから、今度茶でも飲みに行こうよ。奢るからさ」

「お、おお……！　ツギくんにナンパされた。私モテ期かも」
「元気ねえホントに……。じゃあ俺、こっちだから」
「あ、うん。またね！」
そう言って、彼らは分かれた。しかし数秒も経たないで、ツギは響の名を呼んだ。彼女が気づいて振り返るのを確認してから、こう言った。
「さっきの〝内緒話〟。その友達にも黙ってるわけ？」
「……イジワルだよ、ツギくん」
「……聞いてみただけさ」
そう言って彼は手をひらひらと振り、今度こそ別れを告げた。響は何故か、その背中が見えなくなるまで、立ち止まって彼を見ていた。

◇

郊外の、今やシャッター街となり果てたさらに隅の方に、そのレストランはあった。と言ってもとっくに廃業している〝元レストラン〟であり、そこで働いている従業員や

コックなどいようはずもない。時刻はもう真夜中の12時を指しており、廃墟ということもあって、店の中は真っ暗で、それこそ幽霊屋敷のようだった。そんな中に、風鳴翼は入り込み、辺りを見渡した。

「ようこそ、お待ちしてましたよ」

翼は声のする方を見た。そこには彼女の予想通り、あの口裂け男が料理と共にテーブルに座っているのが見えた。料理と言っても、そこにあるのはピザやフライドチキンなど、どこかで買ったのであろうジャンクフードばかりではあったが。

「少し暗いな、明かりをつけよう」

そう言って彼は、どこからともなくロウソクのついた燭台を出し、それにマッチで火をつけた。火の明かりで、二人の顔が——最も一方は中折れ帽子で上半分が隠れているが——露わになった。ツギハギの裂けた口と、そして、翼の敵意に満ちた目が照らされた。

「……何の真似だ、これは」

「手紙は見たんだろう？　お喋りしたいのさ、アンタと。天羽奏について」

「真実とはなんだ？」

彼女はいざという時のためにと、護身用に持ってきた刀の柄に手を添える。彼はそれを見て、わざとらしく手を広げ、怖がるジェスチャーをした。

「おい、おい、そう焦るなって。まず座ってよ」

そう言って彼は翼に向かいの席に座るよう促す。翼は敵意はそのままだが、ここまで来れば断る理由もないため、そこだけは素直に従うことにし、座った。

「飲みものいるかい？　何でもあるぜ、オレンジジュースに、コーラ、ドクターペッパー――」

「さっさと本題を話せ」

翼は苛立ったようにそう聞いた。今回の呼び出しについて、翼は二課の面々には話さずに、単身で乗り込むことにした。彼女が刀を持ってきたのも、聖遺物を使うと二課に察知されるため、代わりの武器が必要だったためだ。

これまでの経験から、口裂け男はいくら大規模な包囲をしても、ことごとく逃げ切ってしまうことを知っていた。しかし、立花響とは対峙したことから、相手が単身あるいは小数ならば、しばらくは逃げないのではないかと言う予測を立てたのだ。ある程度油断させ、隙を見せたら捕縛。単純だが、下手に対策を練るより、効果的だと翼は判断したのだ。

そして何より、彼が言う天羽奏の真実が気になってしまった。自分を誘導する罠だとは知りつつも、この得体の知れない男は、何かを知っているのではないかと、思ってしまったのだ。

「……で、なんだっけ？　あの人、えーと、あも……あもん？」
「天羽奏だ！」
「ああ、そうそう。散々な死に方だったらしいな。応援してくれたオーディエンスも死んで、文字通り命がけで守った奴らも、死んだ奴らの遺族に罪を擦り付けられ、迫害され、自殺した奴までいるときたもんだ。犬死とでも言えばいいのかね、こういうの？」
「――ッ！」
翼は刀を抜き、眼にもとまらぬ速さで振り――そして、ツギハギの首の薄皮が触れる程度のところで止めた。ツギハギは動かない。無表情のまま、彼女の眼を見据えて、言った。
「……そういうもんさ、人ってのは」
「何？」
「あいつ等は普段、聖者のように振る舞い、犯罪者や悪党……まあつまり、規律っていうのを乱すやつに対しては、義憤ってので躊躇なく攻撃する。しかしだ、その攻撃の対象が失われれば、どうなると思う？」
ツギハギは、迫っている刀の峰に手を添え、自分の首に刃をそっとあてた。
「新しい悪党をつくり出す。何だっていいんだ。電車で老人に席を譲らなかったでもい

い。性差別的なことをちょっと言ったやつでもいい。まあ要は、その……群衆のモラルって言えばいいのか、それを味方につけて、あいつ等は聖者ぶりたがるのさ」
「何が言いたいんだ！」
「全員殺しちまえば良かったのさ」
ツギハギの声のトーンが落ちる。するとその瞬間、ツギハギは翼の刃を自分の首に押し込んだ。ツギハギは笑った。
「な!?」
翼は驚いた声をあげてしまう。血は吹き出しこそしないものの、とめどなくそれは切れた場所から赤黒く流れていた。
「観客なんざ全員見捨てて、逃げちまえば良かったのさ。そうすりゃ、天羽奏は生きていた」
「そんな……ことは……」
「それだけじゃない。あんな迫害も起きなかったろう」
彼がそう言った途端、翼は言いかけていた言葉を止めた。彼は続ける。
「あそこで全員が死んでれば、全員が死を悔やまれ、嘆かれ、誰も責められはしなかっただろう。いや、矛先がアンタらになるのかな……どっちにしろ、観客に迫害はなかったろうよ」

「……結果論だ」

「そうとも、しかし真実だ。それをさらに突き詰めるなら、響が天羽奏の〝コスプレ〟をすることも無かったわけだ。あんな風に、戦場に出ることも無かった」

「ではどうしろというのだ！　どうしようもないだろう！」

翼はついに怒りに耐え切れず、怒鳴った。するとツギハギは、心底面白いものでも見るような、そんな眼を彼女に向けて言った。

「アンタが望む通りにやればいいのさ」

「……私、の？」

翼は目を見開き、その言葉を聞いた。

「ああ、二課のためでも、死んだ天羽奏のためでもなく、自分が望む通りのことをすればいい」

ツギハギは刀を放し、置いてあったチキンを一口頬張ってから、話を続けた。

「アンタは響をどうしたい？　あの親友の聖遺物を奪い、生半可に遊び感覚で力を振り回す彼女を、どうしたい？」

翼は息が苦しくなった。考えてはいけないことが、次々と脳裏に浮かんでしまう。それでも、彼の言葉を止めることができない。彼女は、ついぞ彼に何も言い返すことはなかった。

「……まあ、そんなに焦る話でもないさ、ゆっくり考えなよ」

そう言った途端、彼はその場から、きれいさっぱりいなくなった。その場所には、ジャンクフードと、それを照らす燭台と、そして、俯き、微動だにしない翼が、最初からそうであったかのように、置かれてあった。

Ｎｕｍｂｅｒ．０８

翌日、日も暮れ始めた頃、立花響は沈み込んだ表情で、携帯に耳を当てていた。電話の相手は言わずもがな親友であり、〝流れ星を一緒に見よう〟という約束を取り付けた未来なのだが、彼女のこの陰鬱な顔の原因は、その約束を――やむを得ないとはいえ――反故したことにあった。

『……また、大事な用なの？』

「うん……」

『……わかった、なら仕方ないよ。部屋の鍵開けておくから、あまり遅くならないで』

「ありがとう。ごめんね」

響は酷く物悲しくそう言い、通話を切った。彼女は立っていた。誰もいない道の上、地下鉄のプラットフォームに続く下り階段が目の前にあった。彼女はプラットフォームの入り口を背に立っていた。そこには蠢くノイズが魑魅魍魎のように蔓延っていた。

彼女はそこに立っていた。彼女は振り向いた。そして彼女は詠った。そして、そのオレンジ色の鎧を身に纏い、その唄声とともに、彼女は自分の戦いを始めた。

u

Number08. Music Sounds Better With Yo

「――ハッ。あそこまで見事に誘き出せるたあ思わなかった。バカか？　あのガングニールの装者は」

変身して地下プラットフォームへと入っていく響をビルの屋上から遠巻きに見ながら、雪音クリスはそう呟いた。彼女の表情は見下したようなものであったが、隣で座っていたツギハギは、それとはまた違って、それはそれは面白そうに口角を上げていた。それが気に障ったのだろうクリスが、その不機嫌の矛先を彼に向けた。

「……なんだよ、何がそんなに面白いんだよ？」

「面白いさ、響を見るのは。下手すればボンテージ姿で十字架に張り付けられて電流流されてる君を見るより面白いね。あれもマジで笑えるけど」

「はったおすぞ！　――チッ、フィーネと言いお前と言い、なんでそうもアイツに執着してるんだ」

クリスは先程と一変して、苦虫を噛み潰したような顔になった。それを宥めるように……と言うより煽るようにツギハギは手をひらひらと躍らせて、こう言った。

「まあ、あのオバハンの趣味は知らないが、響が良い子なのは間違いないね。真面目で、

優しく、人助けが趣味ときたもんだ。まさにヒーローそのものじゃないか、なあ?」
「……くっだらねえ。それに聞けば聞くほど、お前みたいなのとは相いれない存在じゃないか」
「そうだな、あの子は俺の全てを否定するだろう。だから最高なんだ」
「はあ?」
クリスは意味がわからないとばかりにそう発したが、ツギハギはそれに応えることも無く、その場から立ち上がり、ジーンズについたホコリを払った。とは言っても、使い古された安ものなので、あまりその行為は意味をなしていないようではあった。
「ま、そんなことよりだ。これからの段取りはどうなってんだい、クリス?」
ツギハギは本当に気にしているのかと聞きたくなるような軽い口調で、クリスに聞いた。
「……ああ、そろそろ風鳴翼がアイツを助けに来るはずだ。その時奴が、〝この鎧〟を見てどんな顔するのか、見ものだな」
クリスはそう言って、自分がつけている鎧を軽く手で叩いた。その顔には、ひきつったような笑い顔が張り付いていた。
「助けに、か……〝助けに〟来てくれたらいいな」
誰にも聞こえない声量で、ツギハギはそう呟いた。今の彼の関心は、昨日会った彼女

はどのように仕上がったのかということに向けられていた。それがこちら側の有利になるのか不利になるのか、そんなことは彼にとってどうでもいい。問題は、響はそんな翼を見てどう思うのか、ということだけだ。それだけが今の彼は楽しみで仕方がなかった。

「……と、噂をすればどうとやらだ」

クリスは空を仰いでそう言った。彼女の視線のその先には、青白い、ほうき星のような閃光が、空を駆けていた。

「それじゃあ私も行く。お前はどっかに隠れて――」

そう言って彼女はツギハギの方に視線を戻すが、その先に彼の姿は無かった。

「……ああもう！　どうしてあいつは人の言うことを聞かないんだ！」

彼の姿が消えても、彼がどこに行ったのかはすぐに察しがついたらしく、クリスはその場から飛び出した。向かう先は、響が追っているノイズが逃げ出した場所、そしてあのほうき星の落下地点。

日が完全にくれた夜。公園の広場に、４人は集まることになる。

◇

地下のプラットフォームからノイズを倒し続け、そして最後のひとつを追いかけて地上に戻ってきた響だが、しかし待っていた光景は予想に反したものだった。

ノイズを追いかけた、そして見つけた。しかし倒したのは響ではなく、ほうき星のような光が放った〝何か〟が、ノイズを真っ二つに裂いてしまったのだ。

「翼さん……」

響はそう言って、ほうき星の着地点を見る。そこには彼女の言った通り、聖遺物〝天羽々斬〟の青い鎧を身に付けた風鳴翼がいた。翼は何も言わず、響に見向きもせず、ただ自分が切り刻んだ地面を、見つめていた。

「……私にも、守りたいものがあるんです！」

響のその叫びに、翼は何の反応も返さない。しかしそれでも、響は言葉を続けた。

「だから翼さん、一緒に――」

「無理よ」

翼はようやく響を見て、しかしそう答えた。

「――え？」

言われたことの理解に時間がかかっているのか、響はそれだけしか言えなかった。そ

んな彼女に対して、翼は何も言わず、ただ握りしめた剣を、つい先程にノイズを切り裂いたそれを、響の目の前へと持ってきた。

「……なんで？」

状況を理解したのか、それとも理解はできてないが、ただならぬ気配だけは気づくことができたのか、兎にも角にも、響はそう言って、体を少し強張らせた。それをみながら、翼は言った。

「私は貴方を受け入れられない。肩を並べ、共に戦うなど、風鳴翼が許せるはずがない」

酷く鎮静を貫くその口調で、しかし彼女の眼は、はっきりと敵意を持って響を見据えていた。

風鳴翼は認められなかった。覚悟もなく親友の力を振って、はしゃいでいる響を。風鳴翼は許せなかった。親友が死に物狂いで手に入れた力を、他の誰かがさらっていくのを。故に風鳴翼は、受け入れることに耐えられず、立花響を否定することを〝望んだ〟。彼女の行動は、酷くシンプルな動機だった。

「……貴方もアームドギアを構えなさい」

翼は一歩、響へと近づく。

「わ、私、アームドギアなんてわかりません……わかってないのに構えろなんて……」

響はたじろぎ、不安を象徴するように心臓に手を当てる。その様子を見て翼は、静か

に、鋭い声で言った。
「覚悟も持たずに、ノコノコと遊び半分で戦場に立つ貴方が……貴方が、奏の何を受け継いでいるというの?」
響は翼のその問いに、響はついぞ一言も言い返すことができなかった。翼はそれを見て、無感情にただこう言った。
「胸の覚悟を見せなさい」
そう言って、翼は剣を振りかざした。

「おい、そいつは傷物にしてくれるなよ」

剣が響に届く寸前、突然聞こえた第三者の声。それに翼と響は気を取られ、その声がした方向に振り向いた。足音が聞こえた。そして影が、二人に近づいていた。
雲が晴れる、月の光を遮るものはなくなり、その光は惜しみなく地上に注がれた。光に照らされ、その影が、シルエットから段々とはっきりとした姿を、二人に見せ始めた。
「――! それは!」
それに先に反応したのは、翼だった。彼女はそれを見て、目を見開いた。
銀色の鎧を着た少女、そして派手な飾りのように纏わりつく、紫色の鞭のような、そ

の金属。それは翼の良く知るものだった。
「ネフシュタンの、鎧……！」
「大正解だ」
その言葉を言ったのは、しかし銀色の鎧の少女ではなく、その後ろから聞こえたものだった。その声を聞いて、銀色の鎧の少女は……雪音クリスは鬱陶しそうに舌打ちをした。
「……お前、隠れてろって言ったはずだよな？」
「貴様は……」
クリスと翼はそれぞれ違う言葉を、その声の主に向けた。彼女らが見たその先には、中折れ帽子を被った。まるで絵本に出てくる悪者のような恰好の男がいた。彼をあらわす単語を発したのは、響だった。
「〝口裂け男〟……！」
「響、遊びに来たよ」
まるで恋人にでも会ったかのように、口裂け男は、ツギハギは響を見て手を振った。それを見た途端響は、彼を睨み付けた。
「……何するつもり？」
「そう怖い顔するなよ、響。別に何もしねえよ。今日はただのギャラリーで来たのさ」

ツギハギは響にそう言って、そのまま翼の方に向き直した。
「さあ風鳴翼、どうする?」
ツギハギの言葉に、翼は動かず、ただ彼を見据えた。その視線には、もはや殺意があった。そんな彼女を、彼は愉快そうに見つめ返して、続けた。
「親友を殺した鎧と、親友の力を奪ったやつと、親友を愚弄した男が集まった。さあ、どうする?」
「……知れたこと」
翼は剣を再び構えた。もはや彼女の言葉は、誰に対してのものでもなかった。
「剣に出来ることはただひとつ」
翼は目を開けて、言い放った。
「全て切り伏せるのみ」

その言葉を聞いたとき、響の中で、何かが崩れていくような感覚があった。それが何かは彼女にはまだわからない。しかし、揺るがないと信じていた何かが、バラバラに砕ける音を、彼女は確かに聞いた気がした。
「……お前、説得ってこういうことか? 洗脳でもしたのかよ?」

こちらも翼の様子を見て唖然としたのだろう。クリスはツギハギにそう聞いた。
「出来るわけないだろ。俺は彼女を一押ししただけだよ」
彼はクリスにそれだけ言って、響の方へと近づいていく。響は、ただそれを見つめていた。彼と彼女が数十センチほどの距離になると、彼はこう言った。
「フリー・フォア・オールだ。響」
「何を、言って……？」
「全員が敵で、生き残るのは一人だけ。こんな時、君はどうする？」
ツギハギはそう言って、更に響に近づく、ついにお互いの眼に写る自分が見えるような距離になったとき、彼は「響」と名前を呼んだ。
「俺は君に賭けるよ」
そう言って、彼はコインを一枚、彼女に差し出した。

Ｎｕｍｂｅｒ．０９

「……目的は何なの？」

十数センチに満たない距離の、その裂けた口を前にして立花響はそう聞いた。聞かれた当人であるツギハギは、口を閉じ、退屈そうに彼女を見つめている。

「〝どうして〟の次は〝目的〟ときたか……学校の先生みたいみたいだな」

「はぐらかさないで！　答えてよ、なんでこんな――」

「そんなことより」

ツギハギは響の言葉を遮って、向こうの方へと目を向けた。それにつられ、響も同じ方向を見る。そこには、さっきだったクリスと翼が、お互い睨み合っていた。

「そろそろ始まるぜ。あっちはもうしびれを切らしちまってんだ」

「――！　ダメ！」

そんな二人を見るや否や、響はその方向に走って行った。それを見て、ツギハギは少し困ったように手を広げ、しかしこらえるようにクツクツと笑い出した。

「……躊躇なく止めに行くんだもんな。ああ最高」

誰も聞いていない中で、彼は笑いをこらえながらそう呟いた。

ツギハギがそんな風に鑑賞しているのも気にせず、クリスと翼は互いに構えた。先に口をきいたのはクリスだった。

「アンタ、この鎧の出自を知ってんだろ？　だからそんな怖い顔なんだ」

「……2年前、私の不始末で奪われたものを、奪われた命を、忘れるものか」

何とも皮肉な巡り合わせだと、風鳴翼は思考する。奏を失った原因と、奏の残した聖遺物。両方が時を超えて再び目の前に現れるなど、なんと残酷なことか。しかしそれでも、その残酷は今の私にとっては心地が良い。翼はそう思わずにはいられなかった。

「やめてください翼さん！　相手は人です、同じ人間なんですよ！」

そう言って翼にしがみついてくるのは響だった。翼はそんな彼女に対し、何を言うでもなく、ただ言いようのない感情が入った目向けた。

「……戦場で何をバカなことを」

「翼さん……」

「アナタだって、例外じゃないのよ」

そう言って翼は、響を突き飛ばした。

「――あ!?」

そしてちょうどその時だ。

「よそ見とは余裕じゃねえか！」

そんな声と共に、紫のムチが翼の目の前に迫ってくる。

「くッ――！」

すんでのところで翼は避けた。彼女が一瞬前までいた場所は、瞬く間に地面が痛々しくえぐれる。もし翼が響を突き飛ばさなかったら、今この瞬間、響はあの地面の代わりになっていただろう。起き上がった響はその抉れた地面を見てそう思い、身震いした。

「へえ、こりゃまたすごい迫力だ」

いつの間に響の傍まで来ていたのか、とにかくその場に立っていたツギハギは、二人の戦いを面白そうに見ながらそう言った。響はツギハギを見るが、彼はそれを意に介さない。

「さて、あの二人のどっちかが斃れたら、次はこっちに来るぜ。さて、最後に立ってるのは誰かな？」

俺は君だったら嬉しいけどね、と、ツギハギは面白そうに響にそう付け加えた。響はそんなツギハギに対して、悲痛ともいえるような表情で、再びこう聞いた。

「なんで……」

それを聞いて、ツギハギはため息を吐いた。

「……さっきから、いや最初に会った時からか？　ずいぶんと理由にこだわるじゃないか。そんなのが、そんなに重要か？」

「だって、だっておかしいよ！　私たちが戦う理由なんてないはずなのに、話せばわかりあえるはずなのに！」

その言葉に何か引っかかるものがあったのだろうか、ツギハギは響の方をゆっくりと見て、目を細めた。

「……わかりあえる？」

「そうだよ。アナタが、どんな理由があってこんなことをしているのかはわからない。けど、こんなことしなくたって、話せば何か、他に出来ることがあるはずだよ！」

響はツギハギを見つめていた。それは敵意の視線でも、ましてや殺意のそれでもない。

慈悲、あるいは憐れみのものだった。

「……」

「だから！」

「……ハハ」

「……え？」

「ハハハハハ！　アハハハハハハ！」

それを聞いた途端、ツギハギは腹を抱えて、つんざくような大笑いをしだした。そんな彼の様子を見た響が唖然とし、もはや言葉も出なかった。ひとしきり笑い終え、彼は

「響」と彼女を呼んだ。
「ふざけるな」
先程とはうって変わって、悪魔のような低い声だった。
「ッ……」
「あれだ。つまりお前は、俺が仕方なくこういうことをやってると思ってるわけだ。何かに脅迫されて、やりたくないのにやってるっていう、俺の凶行の”正当性”ってやつを求めてるわけだ」
彼は響の両手で響の顔を包んだ。響はそれに抗えず、ただ不安そうに彼を見つめている。
「ふざけるなよ、響」
彼は静かにそう言った。
「理由なんて求めるな。やりたいことをやるときに、正当性なんて唾を吐きかけるな。悪意を、善意で穢すな」
彼は淡々と、まるで子供にでも言い聞かせるように響に喋りかけていた。響は何も言わない、動きもしない。ただその表情は、化物でも見たようだった。彼は続けた。
「言い訳なんて作らない。救いようがないくらいじゃないと、気持ち良くない。そう思わないか？」

まるで諭すかのように、彼は響に優しく言った。

「……」

響は何も言わない。彼女はどこか、揺れているようだった。

「……私は」

響はそう言って、彼の手に自分の手を近づける。そうする彼女の手は、震えていた。

「私は……」

彼女の手は、ついに彼の手と重なった。そして彼女は。

「そんなの、絶対に認められない」

ツギハギの手を、振り払った。その時の彼女は恐怖で息を荒げ、しかし眼は力強く、ツギハギを見据えていた。

「……へえ」

ツギハギは感嘆した。彼は響の眼の中に、一つの芯が見えた気がした。それは怒りでも、敵意でも、ましてや殺意でもない。

”否定”

響はこのとき初めて、まこと正面から、目の前の口裂け男の全てを否定したのである。

「……やっぱり最高だぜ。マイダーリン」
ツギハギはそんな響を見て、裂けた口を笑顔にして見せた。

「戦場で長話とはな」

その声と共に、響とツギハギめがけて、無数の剣が降り注いできた。
〝千の落涙〟。風鳴翼が纏うアメノハバキリが持つ、人知を超えた剣技のひとつだ。
「ッ！」
響はそれに気づき、とっさに防御態勢をとる。対して、ツギハギは何もせず、ただそれを見つめているだけだ。
「……俺の〝友達は〟、色んなものを入れることができてさ、重いものも持ってくれるから、スーパーとか行ったとき助かるんだ」
彼は突然そんなことを呟きだす。そんなことをしているうちに、剣は彼の目の前まで迫って――
「こんな風に」
――そして消えた。
「なんだと！」

翼は驚いた。彼は一歩も動いていない。まるで手品のように、本当にその場から、彼と響に直撃するはずだった無数の剣が消えたのだ。ではそれはどこに行ったのか。

「返すよ」

彼がそう言った途端、剣は再び姿を現した。翼の……そしてクリスのほぼゼロ距離に。

「な――ぐあ!?」

「ぐッ……ちぃ!」

流石に予想できなかったのだろう。翼は完全に不意を突かれ、直撃した。対するクリスはすんでのところで躱し、何とか事なきを得た。

「へえ、避けるのか。流石だクリス」

「お前なら絶対狙うと思ってたからな、このバカ!」

称賛の言葉を贈るツギハギに、クリスは皮肉たっぷりにそう返した。彼は面白半分で味方を攻撃することがしょっちゅうあり――いわゆる故意のフレンドリファイアというやつだが――クリスは不本意ながらそれに慣れてしまっていた。

「ッ……くそ」

「翼さん!」

一方でダメージを受け倒れた翼に、響は全速力で駆けつけた。見ると、翼は腹部に大

きな裂傷ができており、下手をすれば致命に至るだろう程、それは深く刻まれていた。
その時、翼は弱々しく、彼女を見て、言った。
「やめなさい」
「翼さん……？」
「今の私たちは、敵同士のはず……情けは、無用よ……」
彼女にそう言われ、響は動きが止まった。
「……いやです」
しかしすぐに、彼女に手を差し伸べた。それを見ていた翼は、目を見開いた。
「……何を、しているの？　私は貴方を、殺そうとしたのよ。なんで……」
「そんなの、関係ありません」
響はそう言って、翼を見た。その目には、力強い意思があるように、翼には見えた。
「貴方……」
「もう嫌なんです。誰かが傷つくのも、それを黙って見てるのも」
まるで祈りのように、彼女は言葉を紡いだ。その言葉が、その力強さが、翼は不思議と、懐かしいような気がした。響はこう続けた。
「私はもう、諦めたくない」
響は瞳に涙を浮かべながら、そう呟いた。その言葉に、翼は何故か自分の親友の面影

を見た。

「盛り上がってるところ悪いけどよお」

そんな声が、二人とは別の方向から聞こえた。クリスの声だ。

「そろそろしまいにしようぜ。その傷じゃ〝絶唱〟も使えねえだろ?」

「そうだな、もう飽きてきたし、そろそろ終わらせよう」

クリスの言葉に、ツギハギはそう答える。その言葉に、クリスは少し意外そうな顔をした。

「……へえ、珍しいな。普段なら、もう少し遊びたいとか駄々こねるとこだけど」

「ああ、まあ……ちょっと他にやりたいことがあってさ」

「はあ? やりたいことって何だよ?」

「そうだな……ちょっと急がないと間に合わないかもしれない。だからクリス……」

「なんだよ?」

「おやすみ」

バチンと、大きな音があたりに響いた。
「――ッ!?」
クリスはその音を聞いた瞬間、強い衝撃が体中に走り、その場に倒れた。何が起こったのかわからない。そう思いながらもクリスは、ツギハギを見た。見るとその手には、改造されたであろうスタンガンが携えられていた。
「ネフシュタンの鎧も、一応スタンガンは効くんだな。手間が省けて良かった」
「なん……てめ……」
「ちょっと休んでてくれ。なに、数分もしたら目が覚めるさ」
「ッ……」
彼がそう言い終えたのと同時に、クリスは意識を手放した。ツギハギはそれを確認すると、今度は響の方を見た。
響は、何が起こったのかわからない、という顔をしていた。翼さんが重傷を負って、目の前の鎧の人にとどめを刺されると思って、でもあの口裂け男がいきなり味方を裏切って……予測し得ない事態の連続に、響の頭は追いつけなかった。
「じゃあ響、今ならまだ間に合うからさ」
そんな響の状況を知ってか知らずか、彼は何の気なしに、こう言った。
「流れ星、見に行こうか」

Number. 09 Love it if we made it

Number. 10

「……何、何言ってるの?」

重傷を負った翼を庇いながら、響は茫然とした表情で、目の前のツギハギを見てそう言った。聞かれた当人は、両の手の平をすり合わせながら、お道化たように答えた。

「星だよ、星。今日はこと座流星群が見れるっていう話じゃないか。せっかくのロマンチックな日なんだ。愛しのダーリンと見たいってのは、そんなに変なことかい?」

その言葉を聞いて、響は何も言えなかった。あまりにも理解ができなかった。男の態度も、自分に向けられたその言葉も何もかも。理解できない、というよりも、理解してはいけない。何故か彼女はそう感じた。

響がしばらくの間黙っていることにしびれを切らしたのか、ツギハギはため息をつき、肩をすくめた。

「やれやれ、乗り気じゃないみたいね。やっぱその子が気がかりか」

ツギハギはそう言って翼を指さす。それを見た響は、翼を抱きかかえる力を強くし、ツギハギを睨みつけた。ツギハギはそれに何も言わず、ただあごに手を当てて、わざとらしくうんうんと唸っていた。それを数秒だけやると、彼はすぐに「じゃあ」と言いな

がら手を叩いた。
「こういうのはどう？」
そう言って、彼はどこからともなく〝それ〟を取り出した。
それは普遍的で、世界中にごくありふれた、しかし日本ではあまり見られないもの。
〝拳銃〟だった。
「ッ――！」
ハンドガンを向けられた響は、とっさに翼を庇った。ツギハギは先程と変わらずお道化た口調で、しかし淡々と彼女に告げる。
「ちょっと惜しいけど、今ここで風鳴翼は殺そう。そうすりゃ、響も気兼ねなく行けるだろ？」
その言葉を聞いて、響は唖然とし、同時に戦慄した。狂っているという言葉では表せないかもしれない。もっと根本的な部分、人格を形成するうえで不可欠な何かが、この男には欠落している。そう思わずにはいられないほど、響はツギハギに異常性を感じた。
「装者なら頭か腹に5、6発かな。手間だな、ダムダムでも持ってくればよかった」
「ふ、ふざけないで！　そんな簡単に――」
「俺は大真面目さ、いつだって。ああ、別に邪魔してもいいけど、多分止めるより撃ち殺

す方が早い」

響の叫びも意に介さず、ツギハギはそう言って粛々と弾を込め、銃のハンマーを降ろした。そして、翼に狙いを定め、引き金を

「ッ……わかった！」

――引こうとした寸でのところで、響がそう吠えた。今言うことを聞かなければ、翼さんが殺されてしまう。それよりは、この場は素直に従って、翼さんのことは、この一部始終を見ているはずの二課の人達に任せるべきだ。それ以外、彼女に考えられる術はなかった。

「わかった。一緒に行く、付いていくから。だから……」

響は震えた声でそう続けた。それを聞いたツギハギは、その裂けた口で笑い、銃を手元から〝消した〟。

「初めてのデートだぜ、ダーリン」

彼がそう言ったその瞬間、その場からツギハギの響の2人が〝消えた〟。最早その場所は、2人の倒れた少女と、何もない原っぱが、ただ月光に照らされているだけとなった。

Number10. Counting stars

数分も経たない後、広場に猛烈な速度で走ってきたことが予測できる、大きなブレーキ痕を描いた自動車が停車していた。そこから勢いよくドアを開け、一目散に翼に向

かっていく弦十郎の姿が見えた。
　弦十郎は翼のそばに座り込み、怪我の状態を見ると、苦虫を噛み潰したような顔を見せた。
「クソ、なんてことだ……医療班の到着は？」
「もう間もなくよ。大丈夫、見た感じでは、まだ十分間に合う」
　「とりあえず、応急処置だけはしておくわ」そう言ってきたのは、同行してきた了子だった。了子は翼に今できる最低限の医療処置を即座に施した後、辺りを見回した。もはや原型のない広場を見て、彼女はあることに気づいた。
「……ネフシュタンの鎧は取り逃がしたみたいね。もういないわ」
「了子君、彼女は一体、何者なんだ？」
「それがわかれば、苦労しないんだけどね」
　了子が溜息ついでに漏らしたその言葉に、弦十郎はそれ以上何も言及しなかった。ただ彼には、それ以上に聞きたいことがあったので、そのことを聞くことにした。ただ今度は了子にではなく、二課の情報担当にだ。彼は携帯端末を取り出し、オペレータの藤尭（フジタカ）に繋いだ。
「俺だ、響君の場所は？」
『現在、数十ｋｍ圏内を調べていますが、反応は在りません』

「何か経路を特定できるものは？」
『……ありません。何度かログを確認しましたが、移動した形跡は、まるで見当たりません』
「わかった、引き続き調査を頼む」
『了解』
それを最後に、弦十郎は通話を切る。
「……またしても、してやられたというわけか」
酷く重い口調で彼は言った。それに了子は、宥めるように答える。
「彼女のこと、心配？」
「当たり前だ、あの男に連れ去られたんだぞ」
「……多分だけど、あの子、響ちゃんには手を出さないと思うわ。今のところではあるけど」
どこか遠い目をしてそう言う了子に、弦十郎は「なぜわかる？」とだけ聞いた。それに了子は、弦十郎を見て、少しだけ微笑んで、こう言った。
「女の勘、よ」
その言葉を最後に、弦十郎と了子は、結局医療班が来るまで、一言も話すことはなかった。

◇

場所は変わり、廃墟と化した都市の中、星の明かりしか光源がないような場所に、ツギハギと響はいた。

「足元に気を付けろ。ここで死んだ怨霊があの世に引きずり込むらしいぞ」

クツクツと引き笑いをしながら、ツギハギは自分の後をついてくる響にそう言った。

「……」

それに対し、響は何も言わない。ただじっとツギハギの方を、警戒しているような表情で見ていた。

彼女は今は、シンフォギアを纏っていない。位置がばれるからとツギハギに解除するよう言われたのだ。

――守らないなら、やっぱり彼女は殺す。遠くからだって、リモコンひとつで殺すのはわけないんだ

要するにツギハギは、遠くからでも翼を殺せる仕掛けを施したということだろう。そ

の言葉の真偽はわからないし、ともすればハッタリの可能性の方が大きいだろう。しかしそれでも、響は本当だった場合の可能性を捨てきれなかった。道具を自由に出し入れできる、〝友達〟と呼ぶその能力。あれを目の当たりにした以上、絶対にないとは響は言い切れなかった。

「……おいおい、なんだよしけた面しちゃってさ。やめてくれ、母親を思い出しちまう」

「……母親？」

予想外のワードが予想外の人物から出てきたためか、響はそれについて聞こうとした。

「――それって」

しかし、聞く直前に、響は目の前に、無数の光を見つけた。

夜空を覆う、大量の光の糸。

「……すごい」

目の前に広がる流星の群れを見て、響は言葉を失った。

響は、未来のことを思い出していた。一緒に流れ星を見に行こうと言った。けれど行けなかった。そんな自分が、友達との約束を破った自分が、口裂け男と一緒に、今、星

を見ている。

何て滑稽なのだろう。響はそう感じずにはいられなかった。その息を呑むような流星群の美しさも、こんな状況では、〝彼〟がこしらえた皮肉にしか思えなかった。

「……私をここに連れてきたのは、これを見せるため？」

響はツギハギの方を見ず、ただじっと、辛そうに星を眺めながら、そう聞いた。対してツギハギは、響の方を向いて、それに答えた。

「もちろん。ああ……でも、実はそれ以外にも、君に確かめたいことがあるんだ」

そう言うと、彼は響にゆっくりと近づく。響はツギハギの方に向き直り、それをじっと見つめた。その時、響は恐怖で震えていたが、しかし目をそらすことはしなかった。それを見たツギハギは、静かに、裂けた口角を上げた。

お互いの距離があと一歩ほどのところで、彼は止まった。

「響、見た感じ君は、人助けがずいぶんと好きみたいだ」

ツギハギはそう聞く。響はそれに答えない。

「人助けに、理由はいらない。それが誰かのためになるなら、できる限りのことをやってあげたい。君はそう言うクチじゃないか？」

さらにツギハギは聞く、響は答えない。口を一文字に閉じた響を見て、ツギハギはまた、クツクツと引き笑いをして、言った。

「なら響、俺を殺してみてくれ」

「……え？」

響は自分の耳を疑った。彼は今何と言ったのか、その言葉の意味が一瞬分らなかった。そんな困惑する響をよそに、ツギハギは続けた。

「俺はこれからたくさん殺すぜ、俗に言う〝罪なき善良な民〟ってやつをだ。いっぱいだいっぱい殺す。大人も子供もお姉さんも。色んなバリエーションを用意しよう。煮たり焼いたり、七面鳥みたいに飾ってみるのもいいな」

まるでクリスマスの計画を話す子供のように、彼は心底楽しそうにしていた。それを見た響は、一歩後ずさった。

「何、言って……」

「許してくれない？　面白そうだと思うんだけど」

「ッ……ふ、ふざけないで！　そんなこと、絶対させない！」
「じゃあ今俺を殺さなきゃ」
そう言って、彼は響に顔をグイッと近づけた。「ひっ……」響はそんな短い悲鳴をあげた。
「ほら、このナイフをあげる」
ツギハギはナイフを取り出し、それを響に渡した。響は思わず、それを受け取ってしまう。
「それで俺の喉元を一突きすれば、簡単に殺せる。もうこれ以上誰かが犠牲になることも無い。そうだろ？」
彼は挑発するように、自分の首を指でなぞる。響は動けなかった。
「あー……それとも、銃のほうがいい？　あのコスプレでもいいけど……それだと俺、体が５０個ぐらいに別れんじゃないかな。ハハハハ！」
まるでギャグを言うかのように、心底楽しそうに自分の殺され方を語る彼に対して、響は恐怖した。彼女は思い出してしまったのだ。今目の前にいるのが、人の命を弄ぶシリアルキラーであることを。一度恐れてしまったら、もう止まらない、恐怖は増幅し、もはや喋ることすらままならなくなってしまう。
「ほら響、どうした？」

「あ、う……」
「どうしたやれ！　殺せ！」
「あッ……」
響は恐怖に駆られ、もはや立ってるだけで精一杯だった。息を荒げ、喋ることもできない。そんな彼女に、彼は言った。いや、笑ったまま、叫んだ。

「誰かのせいじゃなく！　お前の意思で！　お前の判断で！　お前の心のままに！　殺せ！」

その言葉聞いた響は、ただ立っていた。
「う……あ……」
ただ震え、ツギハギから目を離すこともできず、ナイフを握りしめていた。
「……ッ」

そして彼女は、思わずナイフを落としてしまった。その後も変わらず、彼を見つめたまま、カタカタと震えていた。

「……なんだよ、ノリ悪いなあ」

彼は一変して、つまらなそうなものを見る目で響を見つめた。響は変わらず、動けなかった。

彼は響から離れ、芝居がかった動きで、肩をすくめてみせた。

「まあいいさ、まだこれからだ。正直今のは期待外れだけど、確信もした。君は光るものを持ってるよ、響」

ツギハギは響の方を見ず、淡々と喋る。それはまるで、サーカスの司会者のようでもあった。

「そうだなあ、まずは……」

そう言って、彼は響を見た。

「意識を変えなきゃなあ」

ツギハギは、響を見て、酷く濁ったような笑い顔を見せた。それを見た響は、まるで子犬のように、体を震わせた。

「響。いつか、その悲しい顔を笑顔に変えて、そのナイフで俺の首を切ってみてくれ。その時の君は、きっとすごくきれいだ」

そう言って、彼はつんざくような笑い声を発し、それがひとしきり終わったと思うと、彼はいつの間にか、その場から消えていた。

「ッ……ハッ……はあ……」

瞬間、響はその場に膝から崩れ落ちた。息を整え、何とか早い鼓動を平常に戻そうと、胸を手で掴んだ。

「はあ……はあ……」

鼓動が少しずつ遅くなる。しかしそれに反比例して、彼女の中の混乱と恐怖は、強まるばかりだった。

「う、うぐ……うわあぁぁぁん……」

彼女は感情に耐え切れず、声をあげて泣いた。響の足元では、ツギハギが彼女に渡したナイフが、流星の光に反射して、冷たくただ光っていた。

Ｎｕｍｂｅｒ．ｌｌ

その場所は酷く乱雑としていた。大量の機材と、それに付着した乾いた血の痕が、この場が何の用途で使われているのか、というのを容易に想像させる。それでいて、その大きくアンティークな窓から入る陽の光のコントラストが、この部屋をどこか厳かにさえ感じられるものにしている。

そんな場所に、クリスと〝彼女〟はいた。

「……苦しい？　クリス」

〝彼女〟はクリスに身体を密着させて、微笑んでそう言った。教師が子供を叱る時のような、いやに抑揚のない声だった。

「かわいそうなクリス。貴方がグズグズしているからよ？　誘い出されたあの子を、連れてくればいいだけだったのに……」

〝彼女〟はクリスのあごに手を添え、顔を自分に向けさせた。クリスは逃げられない。まるで宗教画のように、クリスはその体を磔にされていた。

「……これで、いいんだよな？」

弱り切った体からやっとのこと声を出して、クリスは〝彼女〟にそう聞いた。

「なに？」
「アタシの望みを叶えるには、お前に従っていればいいんだよな……？」
クリスのその声は最早、縋っているようでもあった。
「……そうよ、だから貴方は、私の全てを受け入れなさい」
〝彼女〟はクリスから離れ、大きな機材の前に移動する。
「でないと、嫌いになっちゃうわよ？」
そう言って、そのまま、手前にあるレバーを引いた。
「――――ッ！」
途端、けたたましい機械音と共に、クリスは形容ができないほどの痛みに襲われた。
声にならない悲鳴を叫びながら、クリスは突然に来た痛烈な痛みに身をよじる。
「可愛いクリス。私だけが、貴方を愛してあげられる」
十秒ほど、クリスが叫んでいる姿を眺めると、〝彼女は〟レバーを最初の位置に戻す。
すると、機械の稼働音は止まり、クリスも激痛が収まったのか、叫ぶのをやめ、ぐったりとうなだれていた。
〝彼女〟は再び、クリスに近づいた。
「いい？　クリス。覚えておいてね、クリス。痛みだけが人の心を繋いで絆と結ぶ、世界の真実ということを」

〝彼女〟はクリスを優しく撫でた。クリスは、それに応えるように、優しく微笑んで見せた。

――パチ、パチ、パチと、ゆっくりとした拍手が3回、テーブル席の方から、〝彼女〟の耳を触った。

「……いつからいたのかしら？　ツギハギ」

〝彼女〟は忌々しそうに音の方向を見た。すると、口がパックリと裂けた、おどろおどろしい見た目の少年が、足を組んで、豪奢な椅子に腰を下ろしていた。

「ずっとさ、ずっと。アンタがクリスにお説教を始めてから、『ミスト』のおばさんみたいな素晴らしいお言葉を垂れてるところまで、ずぅっと」

ツギハギは少々不機嫌な口調で、〝彼女〟にそう返した。

「相も変わらず、言葉が支離滅裂な子ね」

「……『ミスト』見てないのか？　本当に？　今度貸してあげようか？」

からかうようなその言葉に、〝彼女〟は心底辟易としていた。

〝彼女〟がクリスとツギハギを拾って、もうずいぶんと経つ。にも関わらず、クリスはともかくとして、ツギハギが何を考えているかは、未だに〝彼女〟にすら理解できな

かった。

——初めは、単なる快楽殺人者（ラスト・マーダ）の類だと考えていた。殺人に躊躇がないし、どころか楽しんでいるふしがあったから。だが最近、また違うことが判ってきた。

そう、違う。彼は、世間一般に言われる気狂いとはまた違う。根本的に、人の精神を形成するうえで必須な何かが、そもそも彼には無いように思える。

彼はある意味では、クリスよりも有用だ。何より、彼の精神は余りにも未知であり、科学者にとってそれは甘い蜜のようでもある。しかし、彼をこのまま私の懐に入れておけば、その蜜に足を取られかねない。時期が来次第、彼は切り捨てる必要があるだろう。

どれほどか昔に〝彼女〟は、ツギハギについて、そんなことを考えた。そろそろ、その時なのかもしれないと、今はそう考えている。

「……聞きたいことが山ほどあるの。私が帰ってくるまで、ここに居なさい、ツギハギ」

「おや、お出かけで？」

「誰かさんが勝手なことをしたせいで、フォローをしなくちゃいけなくなったのよ」

勝手なこと——それは暗に、ツギハギが先日、響にしたことを意味していた。

「……クリスのケアでも、しておきなさい」

そう言って〝彼女〟はそこから立ち去った。ツギハギとすれ違った時、無機物に向けるような冷めた目を、彼に向けた。

「……さて、大丈夫かいクリス？　こってり絞られたようで」

〝彼女〟が出かけて行くのを見送った後、ツギハギはクリスに近づき、その拘束具を取り外しにかかった。そんな彼を、クリスは心底恨めしそうな顔で睨んだ。

「……元はと言えば、お前が余計なことしたせいだろうが」

「そう怒るなよ、ココアでも入れてやるから」

そのからかうような、しかし穏やかな言葉に、クリスは最早、怒る気力すら失くしてしまった。

「……ミルクと、砂糖たっぷり。それと、あんまり見るな……」

クリスは拘束具がすべて外されると、腕で体を隠し始める。と言うのも、彼女は今、ほとんど何も衣類を着ていない状態なのだ。

「そんなことよりクリス、あのオバハンが次に狙ってるもの、なんだっけ？」

ツギハギは毛布を取り出し、クリスにそれを羽織らせながら、そう聞いた。〝そんなこと〟呼ばわりされたクリスは、若干に不満そうな顔をしたが、頭を切り替え、彼の質問に答えた。

「ああ？　何だよ、前に話したろ。完全聖遺物の――」

「それなんだけどさ、今回はパスさせてもらうぜ、俺」

そんなツギハギの答えが予想外だったのか、クリスは「はあ？」と短く言った。

「パスったってお前、だって……」

クリスはいよいよもって、彼が何をしたいのかがわからなくなっていた。そもそも、今回のターゲットは完全聖遺物である〝デュランダル〟。ともすれば、特異災害二課が、即ち、ガングニール装者である響が出てくる可能性が高い。

クリスは考える。ツギハギはそう言う部分に、頭が回らない男ではないはずだ。ではなぜ、あそこまで執着している、あのガングニールの装者とのエンカウントを、わざわざフイにするようなことを言いだすのか？

クリスのそんな考えを、表情辺りから読み取ったのだろうか。ツギハギは答えた。

「もう少し、趣向を変えてみようと思ってさ」

ツギハギはそう言うと、両手でゆっくりと、クリスの顔を包んで、顔を近づけた。クリスは、少しだけ驚いたが、何故か振りほどく気にはなれなかった。

「な、なんだよ？」

「……キレイな眼だな、クリス」

「――!?」

クリスはその言葉に目を見開き、金縛りにあったように動けなくなった。ツギハギは、ゆっくりと、自身の顔を、ほぼゼロ距離にまでクリスの顔に近づける。その眼で、クリスの眼をじっくりと見つめながら、ツギハギはどこかお道化たようにそう言い、続け

た。

「責任と、正義、弱さと、少しの迷い……酷く澄んだ、きれいな瞳だ」

「な……あッ……」

「……だが」

そう言った途端、ツギハギはクリスから手を放した。

「キレイすぎる。君はどうあっても、俺好みになっては、くれそうにはないな」

ツギハギはどこか穏やかな口調で、クリスにそう言った。しかし言われた当の本人は、突然のことに対応しきれず、まだその場から動けないでいた。

「さて」

そう言って彼は、ココアを入れるためにキッチンへと向かった。その間、彼はいつぞや〝彼女〟に見せてもらった、装者に関する、特に響に関するデータの中で、非常に興味深いものがあったことを思い出していた。

その子は響のクラスメイトで、その子は響のルームメイトで、その子は響の唯一無二の親友とのことだった。それだけでも十分興味を惹かれる人物ではあったが、どっこいそれだけじゃない。ツギハギは、その子の顔写真を見て、その子の瞳を見て、思った。

実に魅力的だと。

「次、俺にあった後は、笑ってくれるのかな、響」

彼はそう言いながら、ココアに砂糖を入れた。

◇

ある日の放課後、学園近くの喫茶店に、小日向未来はそこで一人、頼んだオレンジジュースに全く手を付けないまま、1時間ほど動かないでいた。

「……バカ」

未来は誰にも聞こえない程度の声量で、そう言った。彼女が喫茶店にいる理由は、特に深いものでもない。響が何度も何度も、自分に言えないような理由で帰りが遅くなっていることに業を煮やし、それならばと自分も腹いせ交じりに寄り道しているだけのことだ。

無論こんなことが、響に対する意思表示になる等とは、未来自身思っていない。ただ、誰もいない部屋に真っ直ぐ帰るのは、彼女にとってあまりにも味気ないものだった。

なにより、響のいない部屋にいると、気を揉んでしょうがなかった。ある日を境に、目に見えて元気がなくなっている親友のことを考えると、未来はただただ、やり場のない

不安でいっぱいになってしまう。ただほんの少しでも、気を紛らわせたかったのだ。

『――さて、本日のリクエストは皆さんお待ちかね、洋楽特集。気になる最初のナンバーは……』

そんな未来の心情も知らず、喫茶店のラジオは陽気に今日のリクエスト曲なんかを流していた。ぼうっとしながら聴いていると、アップテンポながら、どこかノスタルジーに訴えてくるような曲が多く、普段洋楽をほとんど聞かない未来も、幾分か気がまぎれるくらいには聴き入っていた。

「すいません」

そんな時、隣から男の声が聞こえた。未来はそれに少しだけ驚き、その方向を見た。見るとそこには、顔半分をマフラーで隠した、顔の整った少年がいた。

「すいません、満席みたいで、相席をするよう言われたんですが、よろしいですか？」

彼がそう言ったのを聞くと、未来は少し辺りを見回す、見ると、全ての席に人が座っていて、空いているスペースなど、どこにもなかった。

「え、ええどうぞ」

未来は半ば条件反射のように承諾した後、もうずいぶん長く居座ってしまったことを思い出し、早く店を出たい一心で、目の前にあるオレンジジュースを飲み始めた。

「この流れてるのは、『バグルス』ですかね」

少年は未来に、実に抑揚のない声でそう聞いた。その雰囲気にどこか違和感を感じながらも、未来はそれに耳を傾けた。

”ラジオ・スターの悲劇”だ。お好きですか?」

「い、いいえ。洋楽はあんまり聴く機会がなくて……」

「そうなんですか。それは失礼を……」

そこまでで会話は一旦終わり、妙な静寂が、未来を支配した。彼女は妙にいたたまれなくなり、一心不乱にジュースを飲みながら、良く聴こえる店内ラジオに耳を傾けた。

「……え?」

と、そこで彼女は、ある違和感に気づいた。

”静かすぎる”。先程、目の前にいるこの少年は、”満席”だと言った。実際店は人で溢れている。だと言うのに、何も音がしない。

喧騒ひとつ、話し声ひとつ、コーヒーカップを傾ける音すらしない。

考えてみれば、ラジオの音しかしない。

違和感は不安となり、不安は恐怖となり、未来は、改めて、店内を”よく”見回した。

「……ひッ!?」

そこに座ってたのは人ではなく、〝炭〟だった。カウンターにも、テーブル席にも。あったのはただただ、人の形をした炭だった。

「……バグルスが終わった。次の曲が流れるよ」

未来の目の前に座っている少年が、静かにそう言った。未来は少年の方を見た。少年はマフラーを外していた。耳までパックリと割れた口を、乱雑に縫い合わせていた。

「貴方、一体……」

『さぁ！　続いてお送りするのはこの曲。ザ・キラーズで――』

この場に不釣り合いなほどに、陽気なラジオにテンポを合わせながら、彼は……ツギハギは、彼女のことをこう呼んだ。

「ハロー」

Number 11. Mr. Brightside

彼がその名前を言うと、いつの間にか、2人の姿は喫茶店からきれいさっぱり消えていた。キャッチーな曲を流すそのラジオだけが、ただひとつ、その喫茶店で音を発していた。